しあわせな風景×デザインJAPAN
JUDI 20th Anniversary

ＪＵＤＩブロック連携事業

島の景観セミナー

平成22年10月

目　次

1．セミナー

土庄町町長あいさつ	岡田 好平	4
セミナー主旨	鳴海 邦碩	5
長崎の島の多様性と島の生活	佐保 肇	10
島と島人が輝く仕組みづくり（沖縄から）	前原 信達	19
小豆島の自然と風物	久留島 克彦	28
瀬戸内海景観ガイドライン	安西 慎	40
参加者討議		71

2．現地視察（土庄町肥土山の景観について）　横田 宜明　72

都市環境デザイン会議　ブロック連携セミナー

テーマ：島の景観セミナー

趣旨：

島は海を交流の道とした時代のいわば駅の役割を果し、交流の歴史と文化が形成されてきました。島国である日本には人が常住している島が 315 島あり、そこには多様な自然と文化がみられます。

高齢化・少子化に代表される社会変化を背景に、島の新たな活性化の方向が求められています。そのようななかで、ニューツーリズムの可能性の追求も必要であり、そのためには自然と共生し歴史を活かした環境デザインや魅力ある景観の形成が必要であると考えます。そこで今回、島の暮らしや環境を再認識し、魅力ある環境や景観の形成方向を探る目的で、都市環境デザイン会議は今回のセミナーを企画しました。

宮城道雄の「春の海」は鞆の浦をイメージしたものといわれますが、島ならではの景観を髣髴とさせる曲でもあります。こうした島景観の魅力を味わう機会にもしたいと思います。

なお、本事業は JUDI(都市環境デザイン会議)設立 20 周年記念事業の一環として行うものです。

研修委員会委員長　鳴海邦碩

■日程：

2010 年 10 月 16 日（土）
12:00　集 合　小豆島土庄港ターミナル
12:00～15:00　散策（小豆島土庄町肥土山、農村歌舞伎舞台と棚田、現代アートの風景）
15:30～18:30　セミナー（土庄町総合福祉会館）
19:00～21:00　懇親会

2010 年 10 月 17 日（日）　8:00～15:00　自由散策
①小豆島を回るモデルコース（寒霞渓、醤の里へ）
②瀬戸内国際芸術祭を回るモデルコース（直島へ）
③瀬戸内国際芸術祭を回るモデルコース（豊島へ）

■セミナーの概要

・セミナー主旨説明　鳴海　邦碩（研修委員会委員長）
・長崎からの報告　佐保　肇　（九州ブロックメンバー）
・琉球からの報告　前原　信達（琉球ブロックメンバー）
・小豆島の紹介　久留島克彦（小豆島在住写真家）
・瀬戸内海の景観　安西　慎　（香川県庁）
・参加者討論

■主催：研修委員会
（協力：四国ブロック、中国ブロック、九州ブロック、琉球ブロック、関西ブロック）

■協賛：香川県都市計画協会、土庄町

■参考　「瀬戸内国際芸術祭 2010」
直島，豊島，女木島，男木島，大島，小豆島，犬島，高松港周辺で
2010 年 7 月 19 日（海の日）～10 月 31 日に開催。

■担当者

○研修委員会委員長　鳴海邦碩
○幹事　関西ブロック　横田宜明
○協力　中国ブロック　藤本まりこ
○協力　四国ブロック　真田純子
○協力　九州ブロック　尾辻信宣
○協力　琉球ブロック　木下能里子

■話題提供者のプロフィール

鳴海邦碩（なるみ・くにひろ）

1944 年生まれ　弘前市出身　大阪大学名誉教授、関西大学客員教授、工学博士。都市計画、都市環境デザインが専門。日本都市計画学会元会長。大阪をはじめ各地の景観形成等のまちづくりを支援。サントリー学芸賞等を受賞。主な著書に、『都市の魅力アップ』『失われた風景を求めて』『都市の自由空間』他多数。

・セミナー開催の主旨及び景観形成の意義について

佐保　肇（さぼ・はじめ）

1941 年生まれ　佐世保市出身　法政大学大学院修士課程修了　工学博士　佐保計画工房代表／法政大学デザイン工学部建築学科兼任講師。法政大学大学院で建築を学んだ後、日本設計入社。2001 年に退社し佐保計画工房設立、現在に至る。長崎県西海市大島在住。

・全国一長い海岸線をもつ長崎県は、『島の景観』の話題について事欠かない。壱岐と五島列島を含めた教会建築群や長崎の島の多様性、そして、定年後、東京から離れた島での暮らしを話題提供

前原信達（まえはら・のぶたつ）

1955 年生まれ　那覇市出身　㈱都市科学政策研究所取締役

伝統的建築物群保存調査（竹富島、渡名喜島）、景観計画（石垣市、浦添市等）などを通じて沖縄県内の多くの離島に関わる。

・島が輝き、島人が輝く仕組みづくりを模索しながらの島づくりを話題提供

久留島克彦（くるしま・かつひこ）

1956 年生まれ　小豆島出身

大学卒業後島に帰り全日本写真連盟に入会。現在は全日本写真連盟香川県本部副委員長と小豆島支部長を兼任。またオール関西写真集団の会員でもあり四国新聞文化教室の写真講師も務める。小豆島の自然、風物を中心に撮影活動をしている。

・肥土山の農村歌舞伎、虫送りなどの伝統行事と島の生活、寒霞渓や銚子渓、瀬戸内海の美しい景観を話題提供

安西　慎（あんざい・まこと）

1962 年生まれ　高松市出身　香川県土木部都市計画課課長補佐

京都大学工学部卒業、1986 年に香川県庁入庁。都市計画課で都市政策・計画を担当。その後、高松土木事務所、長尾土木事務所などで、道路改良、河川改修工事等の設計・施工・監理を担当。現在、香川県の景観行政を担当する都市計画課の都市政策・計画グループのグループリーダーを務める。

・瀬戸内海の景観づくりの重要性とその方向性を話題提供

島の景観セミナー

我が国の景観の原型の一つである島景観について、長崎県の島々の景観を佐保肇さん、琉球の島アッチャー（島を歩く人）前原信達さん、地元の写真家久留島克彦さん、香川県で瀬戸内海の景観行政を担当されている安西慎さんから講演をいただき、参加者とともに「島の景観」について考え、将来を展望します。皆様、奮ってご参加ください。

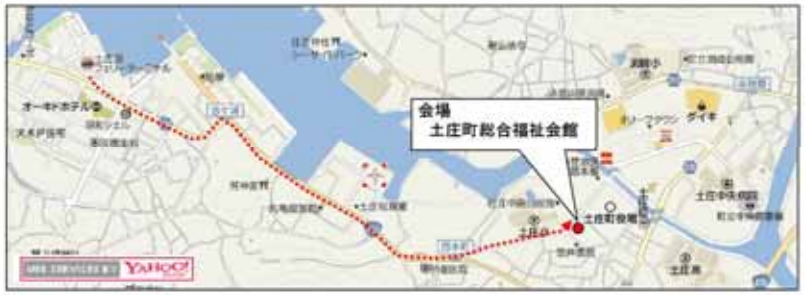
都市環境デザイン会議 研修委員会委員長 大阪大学名誉教授 鳴海邦碩

瀬戸内海（小豆島）　長崎（大島・五島列島・壱岐島）　沖縄（渡名喜島・石垣島）

日　時：平成22年10月16日（土）　15:30～18:30

セミナー前に見学会を開催します。（裏面参照）

会　場：土庄町総合福祉会館　　参加費：無料



主催：都市環境デザイン会議　後援：香川県都市計画協会　土庄町

問い合わせ先　都市環境デザイン会議 研修委員会 「島の景観セミナー 」
事務局　横田　e-mail:simanokeikan@yahoo.co.jp　TEL:086-252-8957
（所属：(株)エイト日本技術開発　都市・地域活性化事業部）

島の景観セミナー　見学会

日 時　　：平成22年10月16日（土）　12:00～15:00
集合時間と場所：12:00 土庄港フェリーターミナル前

タイムスケジュールと見学内容

○土庄港フェリーターミナル前　　12:01発　（路線バス臨時便）　常盤橋12:15着
○見学及び散策　2時間半程度（徒歩1.5km程度）
○中山14:48発　（路線バス臨時便）　合同庁舎前14:56　徒歩で土庄町総合福祉会館へ
○見学場所と内容：土庄町肥土山では、肥土山離宮八幡神社境内の国指定重要有形民俗文化財「肥土山の舞台」において農村歌舞伎が300年以上継承されています。また、夏には伝統的な「虫送り」が続けられています。
小豆島の風景（農村歌舞伎と田園風景）を地元の佐々木邦久氏から説明を受けます。また、この地域は瀬戸内国際芸術祭の会場として、田園風景の中に現代アートが置かれています。伝統的な島の景観と現代アートを見学します。

「瀬戸内国際芸術祭2010 アートインフォメーション小豆島版」より引用　http://setouchi-artfest.jp/

肥土山の農村歌舞伎。毎年5月に開催されます。舞台は国指定重要有形民俗文化財。

約300年の歴史といわれる、火で稲の虫を追い払い豊作を祈願する肥土山の「虫送り」

太鼓祭　10月11日～10月16日の間に島内6箇所で順に行われ、16日は池田亀山八幡宮です。

都市環境ﾃﾞｻﾞｲﾝ会議（JUDI =Japan Urban Design Institute）とは　http://www.judi.gr.jp/

都市環境のﾃﾞｻﾞｲﾝに係わる各分野、各地域、さらに国、地方公共団体、大学、コンサルタント、企業等の異なる立場にある人々を横断的に結び、領域を越えて相互に意見交換し、協力して魅力ある都市環境の形成に努めるべく活動している全国組織の任意の団体です。1991年5月に設立し、会員の資質向上とともに、都市環境デザインの重要さについて広く社会の認識を高め、これらを通じて質の高い都市環境の実現を目指しています。

■開会の辞

これより島の景観セミナーをはじめます。今日はお忙しい中、皆様ご参加いただきましてありがとうございます。また、本日は、このセミナーに協賛いただいております土庄町、岡田町長に来ていただいております。ここで町長よりあいさつをいただきたいと思います。

■土庄町町長あいさつ　（岡田好平）

岡田：

本日は、都市環境デザイン会議主催の「島の景観セミナー」で、遠路土庄町においで頂きましてありがとうございます。一言、歓迎のご挨拶を申し上げます。

都市環境デザイン会議の皆様には、各分野、各地域、さらに国、地方公共団体、大学、コンサルタント、企業等の異なる立場にある人々が横断的に、領域を越えて相互に意見交換し、協力して魅力ある都市環境の形成に努めるべく活動しているとお聞きしております。

そのような中、土庄町において「島の景観セミナー」の開催を計画していただいた鳴海研修委員会委員長には厚くお礼申し上げます。

昨年度に香川県におきまして、瀬戸内海の多島美景観におけるガイドラインが作成され、そのモデル地区として土庄町、小豆島町、直島町が検討されました。その時の検討委員会委員長としても鳴海様にはお世話になりました。

さて、土庄町には自然の景観、歴史的な景観、都市・集落の景観、文化的な景観などさまざまな景観がございます。特に、先ほど見学いただいた肥土山の農村歌舞伎舞台は国の重要有形民俗文化財であり、あわせて周辺は 10 月 31 日まで瀬戸内国際芸術祭の作品エリアとなっておりまして、予想を上回るお客様がいらしてます。（小豆島：60,400 人、豊島：101,731 人、H22.10.7 現在）

本日は、「長崎県の島々の景観」や「琉球の島づくり」のご講演や、地元小豆島の写真家久留島様、香川県都市計画課の安西課長補佐様のご講演など、大変貴重なセミナーになろうかと思います。

よろしくお願いいたしまいして、簡単ではありますが、歓迎の挨拶とさせていただきます。

■主旨説明　（鳴海邦碩）

鳴海：

ＪＵＤＩ（都市環境デザイン会議）は都市環境デザインやまちづくりに関連する様々な分野の方々、専門家が集まって横断的な組織を作り、お互いに切磋琢磨しようという目的で作った団体です。全国では会員が 400 名くらいおります。

今回設立 20 周年を迎えるにあたりまして、中国・四国・九州・琉球など、主に西にあるブロックの連携事業として、研修委員会とともにこのセミナーを企画いたしました。全国の皆さんにアンケート等で意見を集めたところ、半島や島など、普段私達の仕事であまり馴染みのない地域を取り上げて地域の有り様について勉強してはどうかというご提案がありまして、今回「島」を取り上げて、主に景観の観点からセミナーを行うことになったわけです。

本日は私の主旨説明と、九州ブロック・琉球ブロックから代表としてお二方にお話し頂いて、後で地元の方々の話をまじえて意見交換をしたいと考えています。

では、前座として、今日のテーマについて一つの考え方をご紹介したいと思います。

「風景」とか「景観」という言葉は普段あまり使わないかもしれませんが、元々は地理の言葉でして、地域の環境と人間の暮らしが相まって作り出している様子を「景観」と呼びます。簡単に言えば「景観」というのは「見える環境」だと捉えて頂ければいいかと思います。その「見える環境」の中に、私達にとても大きな感動を与える景観があるということです。

現在「瀬戸内国際芸術祭」が開かれており、今日私もその現場を少し見てきました。“芸術”も一つの環境をつくりますが、私達の関心は、この地域の環境そのものが人を惹きつけるという観点に立っています。そういう意味で「景観は、まちづくりの見える結果である」と捉えれば良いのではないかと思います。

「景観」という観点から環境を整備していくには、４つの目的があると言われています。

一つは「人を迎えるための景観整備」です。例えば偉い人が来るとか外国から使節団が来るときに景観を整備するわけです。また国体などがあると全県をあげて環境整備します。これが一つです。

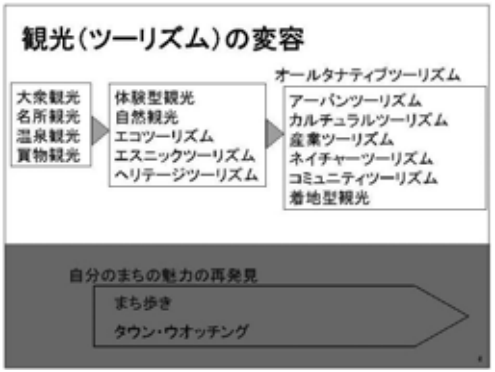
それから魅力的な景観というのは人を惹きつけますから、「観光資源としての景観整備」をしていかなければいけないという考えがあります。

それから「地域の誇りとしての景観整備」があります。良い景観、良い環境を持っている地域は、

そこ住む人々にとって誇りになります。私は大学で学生に最初の講義を行う時、何処出身か自己紹介させるのですが、小さな町の出身者は恥ずかしそうに発表するんですね。しかし小さな町の出身者でも、何か魅力があるとかテレビで報道されたとかいった町の出身者はとても大きな声で自己紹介するのです。また、タクシー運転手が自分の町を自慢する所は大抵良い町です。そういうことで、地域の誇りなるという事がとても大きい価値としてあるのではないかと思います。

四つ目は「当たり前のこととしての景観整備」です。例えば自分の家や庭は当たり前の事としてみんな綺麗にしようとしますよね。それと同じように、当たり前の事として優れた景観を持った町をつくろう、あるいは子供の育つ環境を整えていこうとする事も、当たり前の観点から景観を整備していくということです。

ですから自分も楽しめるし人にも楽しんでもらう、そして人を思いやる、そういったことが環境整備や景観整備につながるのではないかと、これまで色んな観点から言われて参りました。



今瀬戸内国際芸術祭に沢山の方がいらっしゃっていますが、1970 年に大阪万博が開催されて以降、旅をする事が日本人にとって非常に大きな楽しみになってきました。1970 年に「ディスカバー・ジャパン」というキャンペーンが行なわれ、それ以降とても国民の旅行熱が高まりました。ですから生活水準が上がると旅行が増える。今、中国の旅行者がとても増えていますが、これは中国の生活水準が上がっているからです。

また国内とともに海外旅行も増えています。1970 年、万博が開かれた年に海外旅行者は日本全国で 66 万人しかいませんでしたが、10 年経つと 400 万人になり、さらに 10 年経つと 1100 万人になって、2000 年には 1800 万人が海外旅行しています。今もだいたいこれぐらいは海外旅行しています。

これと比べても国内旅行では莫大な人が旅行しているというのが想像できます。

これは国際観光の数字を比べてみたものです。フランスは世界で一番受け入れ数が多くて、外国人観光客が 7000 万人を超えています。日本はまだ 600 万人という段階ですから、これからアジアの国々が豊かになっていきますと、どんどん増えていく可能性があると思います。

そういう「観光」という観点から振り返ってみますと、今から 30 年ほど前には大衆観光や温泉観光といった観光でありましたけれども、次第に体験型の観光に変わってきているわけです。

今オルタナティブ・ツーリズムという新しい観光が話題になっております。例えばアーバンツーリズムというのは街を楽しむという事、カルチュラルツーリズムはその地域の文化を楽しむという観光、

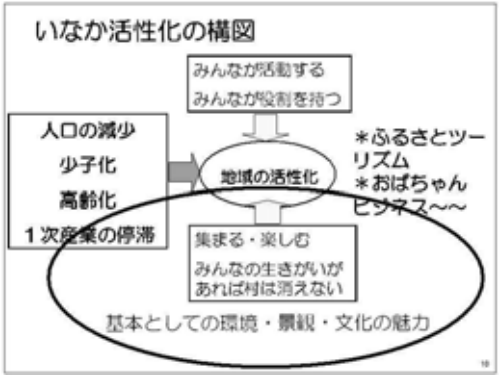
あるいは産業自身も観光の対象になるなど、様々な観光の形が出てまいりました。
　その中で私達はコミュニティツーリズムというのが非常に面白いと思っています。これは有名な観光地ではなくて普通の街の生活を味わってみるというもので、それが故郷を味わっているような気持ちになるのですね。そういったことを楽しむような事も、とても大きな観光の流れとして出て参りました。

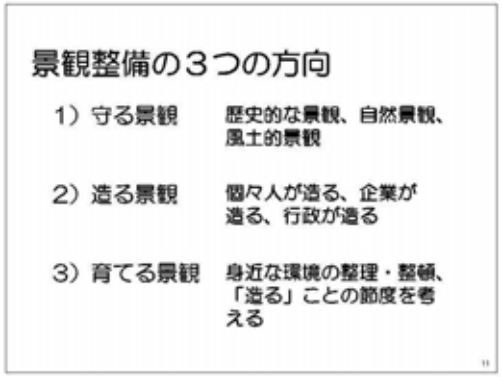
ワイン村　のんびり滞在を楽しむ人が多い

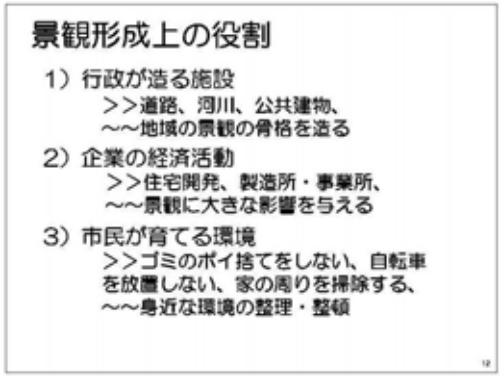
ワイン村　のんびり滞在を楽しむ人が多い

　石森秀三先生、以前は大阪にあります国立民族博物館の先生をしておられましたが、今は北海道大学で観光学研究所の所長さんをされています。
　彼が以前、世界中で観光に支出される費用の総額は世界の軍事費を上回っているとお話されました。しかしどこかでテロや戦争が起こると観光客が減る。ですから「観光」というのは平和の産業なんだという事をとても強調されておりました。この事からも、これからのアジア地域は観光による経済発展の可能性を追求しないといけないのではないかと言えます。
　今都市の活性化がとても重要視されています。例えば大阪のような都市の中心部でも人口が減って空洞化しております。また地方都市や田舎の農村・漁村ではお年寄りが増えたり人口が減ったり、以前のような活力が無くなったと言われております。けれども、地域活性化の一つの方法としてツーリズム、観光がとても大きな役割を果たすのではないでしょうか。
　なぜならそこには人の交流が起こるからです。人の交流があることによって、街の活性化とか活力が増していく、それが一つの街づくりの方向になるのではないかということが、色んな観点から検討されていますし、あるいはそういったまちづくりが実際試みられているわけです。

　ドイツ人は休暇になると車でヨーロッパ中旅行するそうです。特に若者は国境を越えてあちこちの街に行きますが、子供や年寄りがいる家族は近場の田舎にいって１週間から 10 日ほどの長い期間のんびり暮らします。そういった旅行がとても盛んです。ドイツでは小さな村や小さな街の環境づくりをとても熱心に行ってきた歴史があります。そういった所では例えば普通の民家が民宿になっていたりします。







一方日本では人口は減少するし少子化が進むし高齢化するし、一次地域産業は停滞してくる。そういった中で地域、いなかの活性化をどうやっていくか。その方向はいろんな方向があります。

皆さんご存じかと思いますが、最近おばちゃんビジネスというのがとても盛んです。地域の女性たちが自前でいろんな仕事を興しているのです。あるいは「ふるさとツーリズム」というのが非常に盛んになってきました。こういった事によって、一つの地域の環境をつくっていくことが非常に大きな可能性を持っていると思います。

その基本となる環境、景観、あるいは文化の魅力を大事にし、もっと育てる事が基礎になるわけで、そういう観点からの景観づくりがとても重要な役割を持っているのではないかと考えています。

景観づくりというと、堅苦しかったり、法律でしばる規制ばかりだと思うかもしれません。そういうことではなくて、皆がそれに係わって皆が楽しく、その地域で自分の暮らしを楽しもうという意志がそこの環境づくりに伝わっていく事だと思います。それによって地域活性化が次第に出来ていくのではないか。そういう方向に景観づくりというものが大きな役割を果たし得るのではないかと考えています。

さて景観の整備の方向には３つの方向があります。

一つは街あるいは地域にある優れたものを「守る」ということ。それから「造っていく」景観というのもとても重要です。３つ目は「育てる」ことです。その地域にある身近な環境を皆で育てていくことによって、全体として街の風景なり景観が生まれてきます。

そういう３つの方向をいろんな方々、お役所、地域の事業者も関わりながら、守って造って育てていく事によって魅力的な環境・景観がつくっていけるのではないかと考えております。

行政が造る施設というのは景観の中で重要な役割を果たします。道路とか河川とか公共施設とかは景観の骨格をつくりますので、これはとても重要です。

それから企業が行う経済活動も景観にとても大きい影響を与えるわけで、開発したり建物を建てたり、あるいは自分の会社の事業所を造ることも、景観づくりの中でとても大きい役割を果たします。

それから市民が育てる環境というのも重要で、一番大事なのはゴミのポイ捨てをしないとか、河川を綺麗にするとか、そういう身近な事から始まる、そこに住んでいる方々が育てていく環境も景観形成上のとても大きな役割を果たしています。

私は昨年小豆島や直島などいくつかの島を巡って、島ならではの景観を色々見せて頂きました。その中で石の持っている景観の楽しさですとか、漁村集落や港集落なども、色々素晴らしい景色を持っているのではないかと思います。

今日は九州の五島列島の島々、あるいは琉球の島々で、景観あるいはまちづくりの専門の仕事をされているＪＵＤＩのメンバーに五島列島と琉球の事例について報告して頂き、小豆島など瀬戸内の景観とどういうふうに違うかとか、そういうことを比較しながら、島の景観づくりはどうあればよいかということを皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

これはお醤油屋さんの多い界隈「醤醢の里」です。産業がみせる景観もなかなか魅力的な景観なのではないでしょうか。これはオリーブの木ですよね。こういう港の景観もなかなか面白い。工場にも捨てたものではない魅力があります。

宮城道雄は鞆の浦の風景を見て「春の海」を作曲しましたけれども、私はいつもこういう風景を見るとあの曲を思い出します。単に景色だけではなくて、音楽を感じます。

こういった風景の中に瀬戸内の島々の環境的な魅力が潜んでいるし、それをどうやってより優れた、あるいは魅力的なものにしていけるかヒントを頂ければ、私ども都市環境デザイン会議のメンバーとしても新しい勉強になると思いますので、皆さんには意見交換をよろしくお願いしたいと思っております。

以上で一つの問題提起と言いますか、最初の糸口の主旨説明に加えまして、少しスライドの説明を致しました。どうもありがとうございます。

■長崎の島の多様性と島の生活　（佐保肇）

こんにちは。今ご紹介頂きました佐保でございます。

私に与えられた今日のテーマは長崎の「島」ですけれども、今回のプレゼンテーションをつくるに当たって、島にはそれぞれ個性がありましてなかなか捉えにくく、非常に苦悩致しました。

今日は長崎の島々に絞ってご紹介し、また色々ご意見頂ければと思っております。

私の住んでいるのは大島と言いまして、ここ小豆島からは約 640ｋm離れております。これからお話しますのは壱岐、五島、そして大島についてです。朝鮮半島と対馬の間は大体 40㎞ぐらいの距離がありまして、ヨーロッパでいうとイギリスとフランスより若干短く、長崎の島々は大陸に近い位置にあります。

ただ日本の場合は朝鮮半島とあまり日常的な交流がなく、ヨーロッパみたいに、例えば今日みたいな休日にはフランスから自転車を持ってフェリーに乗り、イギリスの街を楽しむというような状況にはまだなっていません。鳴海先生がおっしゃったように、もう少しそのくらいまで我々の生活もゆったりできるようになればと思います。

長崎の海岸線の長さは約 2.4 千キロあり、日本一です。世界で比べますと日本は６番目になっており、その長さは約 3 万 4 千キロです。日本は面積が小さく、海岸線の世界一長いカナダなどは面積が広いので、面積当たりで言えば日本は非常に長い海岸線を有しています。中国は１１番目くらいです。アメリカや中国は大陸が大きいので海岸線も長いですけれども、内陸国です。アメリカ人がハワイとかカリブ海諸国に行ったりするのと同じように、中国も内陸国だから日本の島々というのは中国人にとっては非常に魅力的な場所なのではないかと思います。

今日取り上げます壱岐と五島と大島ですが、それぞれ非常に大きな違いがございます。

島々の特性／経済環境

	面積(km2)	人口(千人)	人口密度(人/km2)	産業別就業人口比	備考
壱岐	138	31	225	27 : 17 : 56	壱岐市
五島	213	25	117	14 : 17 : 69	上五島町
大島	27	9	333	7 : 43 : 50	西海市大島町・崎戸町
小豆島	170	34	200	7 : 33 : 60	土庄町・小豆島町

島々の特性／自然環境

	面積(km2)	海岸線(km)	面積当り海岸線の長さ	最高標高(m)	備考
壱岐	133	168	1.26	213	壱岐島
五島	168	±330	±2.00	442	中通島
大島	14	54	3.86	194	大島
小豆島	153	126	0.82	817	小豆島

面積当り海岸線の長さ＝海岸線÷面積＝km/km2
参考：福江島0.99　佐渡島0.31　沖縄本島0.46　対馬1.29　大三島1.38　周防大島1.25

壱岐／水田と樹林地が織り成す土地利用

（航空写真）Google Earth

小豆島を含めた４島を比べてみますが、それぞれに大きな違いがあります。一番違うのは標高で、壱岐では一番高いところで 118mくらいしかないですが、大島が 200mくらい、五島だと結構高い山があって 400mくらい、小豆島は 800mを超える高い山があります。地形が平坦な島と急峻な島とがあり、その結果産業もいろいろ違ってくるわけです。

壱岐では第一次産業が盛んです。ほとんど平坦なものですから島でありながら農業が卓越している。一方五島は急峻ですから農業は盛んではありません。大島はちょっと面積が小さく、造船所が立地しているため第二次産業が盛んです。人口が隣の崎戸町と合わせて 9000 人弱ですけれども、全国的にも珍しい昼間人口の方が多い島になっています。

これが壱岐です。全体に小さな小高い緑の丘があって、島でありながら非常に広い水田地帯があり、長崎県の中で一番か二番くらいの広さがあります。また弥生時代の民家を復元したものがありまして、最近博物館をつくって出土品を展示しています。
島としては珍しく、そこで消費する農産品は全部だいたいまかなえる自給自足が可能な島です。

低地で、平らなものですから、農地と集落が島全体に散在している散居村的空間が特徴的な風景です。
壱岐は小豆島に比べれば真っ平らだと思いますが、山間（やまあい）に農家が点在して、間に水田が広がっています。

壱岐／長崎では数少ない広大な水田地帯

壱岐／樹林地縁辺の散居村的空間

（航空写真）Google Earth

壱岐／樹林地・水田・集落

壱岐の中心部は昔いわゆる漁村だったところです。ただしここには伝統的な風景はなく、全部新しく変わっています。

平戸・大島／過疎化が進む伝建地区

これは平戸の大島という所ですが、ほとんど過疎化しています。

過疎化しているのですが伝建地区に指定され、ファザードの修復をやったりしています。私自身非常に疑問に思っているのですが、人がどんどん住まなくなっている所を伝建地区にし、一方で壱岐の中心部のように活力が残っている所は伝統的な建物がどんどん壊れて新しくなるという矛盾が発生しております。ここのところが整理がついておらず、今後の課題だと思っています。

五島列島／青い海と緑の島々

これは五島の典型的な風景だろうと思いますが、海から山がいきなりせり上がったような景観が見られます。

このスライドの遠景に小値賀（おぢか）島というのがあるのですが、ここでは自分達は自立出来るという事で佐世保市とも五島とも町村合併せずに独立していまして、真っ平ら（な地形）でほとんど畑と漁業が中心の島です。

五島列島／多様性ー人工環境と自然環境

（航空写真：Google Earth）

小値賀空港というのがありまして、平らな部分に白く見えるのはだいたい水田で農業が盛んです、港では漁業をやっていますが、それ以外はほとんど山だけです。ですから島といっても人工環境と自然環境が非常に対比的に存在しています。

五島列島／島々には珍しい緑のモール

これは小値賀の中心にある「緑のモール」ですが、真っ平らで、一般に島にこんな風景がある所はなかなか無いと思います。これ沿いに学校などが分布しています。

五島／海岸から離れた山地の農家集落

（航空写真：Google Earth）

五島では隠れキリシタンの歴史があります。先ほどの壱岐には全くキリシタンの教会がありません。壱岐はどちらかというと朝鮮半島から日本に向けての文化の流れがあって、キリスト教関係の教会が一つもないのですが、五島には多く分布しています。

山の中にぽつんと集落があります。これは隠れキリシタンの歴史を有する集落ですけれども、海岸線には昔からの漁村や農村など在来の方々が使っている生活空間が多いため、隠れキリシタンはそういう所から人里離れた所に自分達の集落をつくっています。

五島／山地に建つキリスト教会と集落

これがその一つです。非常に小さい教会ですが、集落としても 10 軒とか 20 軒の集落がこういった形で存在しています。

五島／水と緑で隔離された集落

現在はこの島には橋がかかっていますが、これは空港が出来たためで元々はありませんでした。

このように山だけではなくて、小さな入り江にもキリシタンの集落があります。歴史的にはそれらの集落は水と緑で隔離されてきました。水辺から石造りの教会が見えますが、長崎県では今こういったものを世界遺産に登録しようとして努力されているところです。

大島／複雑な海岸線－人工海岸と自然海岸

私が住んでいる大島は複雑な海岸線を持っていて、今だいたい 6000 人くらいがここに住んでいます。実は 10 年ほど前に橋がかかり、そういう意味から行くと完全な離島では無くなっています。1975 年、ここに造船業が新たに進出し、非常に大量の船を造っています。

人工海岸と自然海岸があり、冒頭でも言いましたように非常に海岸線が長い。何故かというと、元々は炭坑の島で、水辺が陥没して入り江がどんどん深くなっているのです。従って陥没によって出来た入り江は人工海岸と云えるでしょう。

大島／陥没による入り江ー炭鉱の遺物

（航空写真）Google Earth

これが陥没による入り江であり、炭坑の遺物です。元々は海岸線が緩やかに続いていたのですが、それが陥没してどんどん切り上がり、入り江が出現しました。今ではその一部は埋め立ててグラウンドや野球場をつくっています。

陥没してから 40 年近く経っているため、人工的なものには見えず、随分昔から入り江があるように見えます。

壱岐や五島もそうですけれども、大島は外洋に面しているので非常に波が荒く、何か造ろうとするとテトラポットばかりになってしまいます。そんな中ここは非常に静かな入り江になっておりまして、潮干狩りや子供達が釣りをする場所として景観的にも非常に貴重な存在になっております。

大島／暮らしを支える造船所ー1974年造船開始

これが 1974 年に出来た造船所です。閉山による経済低迷から脱出するために、人口 6000 人の町が全力を挙げて企業誘致をしました。

坂出（さかいで）の川崎造船のヤードを見ましたけれども、あれよりも規模が大きくて、もっと大きな船を造っています。

大島／市街地の風景ー炭住・従業員住宅・造船所

これは元々炭坑住宅だったのですが、時代が変わって今は造船所に勤める人が住んでいます。ここでは全部炭坑のボタで埋めて宅地造成を行ってきました。島なものですから、廃材を持ち出す場所がなく、島の中で全てを処理しなければならなかったからです。掘った物で埋めて学校や住宅地をつくるといったことを繰り返してきました。

元の大島町長は秋山隆雄さんと言いまして、全国離島振興協議会の会長をされていた方です。まちづくりには非常に熱心でして、私が引っ越した理由も、町長と 30 年のつきあいからです。10～15 年くらい前からインターネットの時代になり、昔は我々みたいな仕事は島ではできませんでしたが、今は東京で仕事するのと全く変わらなくなりました。例えば国勢調査のデータも東京の総務省統計局に行って集めていたのが、今はおおよその数字は全部インターネットでわかるようになりまして、ほとんど仕事上の不便さというのは無くなりました。島は不便であるということが一掃されたと考えます。

私が引っ越したもう一つの理由というのは、都市計画をやっていますと偉そうな事を言うのです。

「うるおいのまちづくり」とか「快適なまちづくり」とか「豊かな環境」とか言っているけれども、自分の住んでいる身の回りを見ますと、言っていることと現実とに大きな違いがあります。私は多摩ニュータウンに住んでいたのですが、ニュータウンの中の 300 ㎡くらいの宅地分譲地に 160 ㎡くらいの建物を造って住んでいたのですが、そうすると隣がもう目と鼻の先なのです。潤いも何も全く無くて、人には偉そうに言っておきながら自分はみすぼらしい環境だと思っていました。それで二重人格的な気持ちがずっと続いていて、どうにかしないといけないという思いが強かった。それで大島に引っ越したのです。

島に住んでいても、インターネットで特に情報問題はないですし、飛行機も 12000 円くらいで東京に行けるということで費用的にも楽になった。そういうことで引っ越したのです。

今回小豆島には初めてお邪魔しましたが、橋がないために大島よりはそういった意味では不便なものの、船であちこちと繋がっていますから、もう都会の真ん中にいるような気がします。非常に素晴らしい仕事ができるような場所だという印象を持ちました。

話に戻りますが、やはり島を活性化するには景観が大事だということで、これは港に面した公営住宅です。これは港から見た風景ですが、みすぼらしい。そこで国交省の公営住宅の景観改善事業という補助事業がありまして、一戸あたり 70 万円くらいと結構予算の大きい事業なのですが、それでまちをきれいにしようという事になりました。

島のもう一つの狙いは就業機会の確保です。

ある集落では、元々は広かったのが今は半分無くなっており、廃屋になっている所もあります。そういった集落では皆さん東京や大阪、名古屋に出ていった結果です。そこで、ここに農家民宿みたいなものを創ろうという試みをしました。例えば農家や漁家の次男三男がこういうものをつくって、ここに定着させてはどうかという試みなのです。

他にもなるべく人に来てもらって、なるべく楽しいものをつくろうということで、小さい野外劇場を造ったり、島全体を俯瞰できる展望台を造ってみたり、グラウンドのそばに若い人達が合宿をするような簡単なロッジもつくりました。

これが先ほどの本土と結ぶ「大島大橋」です。瀬戸大橋とは違って２車線しかなく鉄道も走っていませんから非常に薄くて、ここも 1000mくらいスパンがあります。

このように、なにしろ風景を綺麗にしようというのが、この大島での試みです。

港に面して文化ホールをつくったり港の周りの広場を整備し、それにつながる公営住宅の景観改善も事業化しました。

こうした細々した試みをやった主旨は、身の丈にあった環境整備をしようということ、そしてもう一つは景観を大事にしようという事でした。例えば観光もそうですが、外から来た人の第一印象を一番決定づけるのは景観だろうということで、景観重視で一貫したデザインコンセプトでやりました。

また、常に地場産業と連携して日常生活の向上を目指すこともねらいでした。

そしてそれらを一つ一つ 30 年くらいの間に整備していき、持続性の高いまちづくりを目指そうとしているわけです。

それから島というのは非常に領域がはっきりしています。例えば東京、大阪、福岡もそうですが、普通他の市町村との境は陸地で、どこからどこまでが領域かが視覚的にはわかりません。

一方島は領域が非常にはっきりしているものですから、そういう意味では個性を非常に顕在化しやすい。これを大事にしようじゃないかという考えがあります。

また当然のことながら住民、行政、企業との持続的連携強化ということで随分努力をしてきたのですが、これは全国的にも色々同じような問題があると思いますが、大島を含めて５町が合併した結果、先ほど言った領域がはっきりした所での個性の顕在化といった事が全部ご破算になって同じ行政区域になってしまったのです。

ですから持続性の中断といいますか、非常に大きな問題が起こって、それぞれの島の多様性を重視

しようとする多様化という視点から、合併によって平準化とか均一化という方向にどんどん走り出した。これについてはストップがかけられないという状況になってきています。

　島単位で領域がはっきりしていると、まとまりやすいのでコミュニティも非常に活発だったのですが、その枠が外れてしまうと、やはりどんどん街の疲弊化が進む。そうすると風景も変わってくるのです。　例えばゴミは落とさないとか、夏になったら月に１回草刈りをするといった事が、どんどん２ヶ月に１度になり、３ヶ月に１度になりということで、急激にコミュニティの活動が貧しくなってきた。これをみても合併によってやはり随分景観が変わるのだなと思います。これは大島だけなのか、他の所はどうなのか、今後の非常に大きな課題だろうと思っています。
　私の報告は以上です。どうもありがとうございました。

■島と島人が輝く仕組みづくり（沖縄から）　（前原信達）

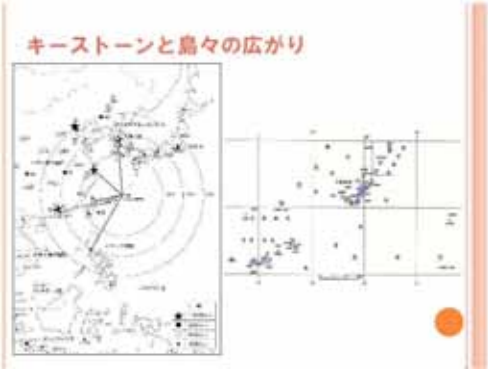
みなさんこんにちは。「しまあっちゃー（島歩人）」の前原でございます。

沖縄には「うみあっちゃー（海を歩く人）」という言葉があります。漁師さんのことを言います。「しまあっちゃー」という言葉は聞きませんが、今回鳴海先生から「しまっちゃー」という言葉を頂きまして、なかなか良い言葉だなと私も気に入っている所です。

私からは沖縄の渡名喜島（となきじま）と竹富島のご報告をさせて頂きます。ただ渡名喜島、竹富島に入る前に、まず「一括りにできない沖縄」について少し説明します。

まずは沖縄の空間的な広がりを見てください。一言で沖縄と言いますが、東西 1000ｋｍ、南北 400ｋｍの広がりがあります。これに奄美大島まで含めると南北 500㎞ になります。大阪から九州まで全部含めた範囲くらいになると思います。こういった海域の中に 40 くらいの有人島が分布しています。無人島も入れると 60 くらいあります。

私はずっと那覇で生まれ育って、これは全部沖縄だという感覚があるのですが、どうも実際はそうではない。例えば宮古島、八重山などに行くと「沖縄から来たのですか？」と言われて、すごくカルチャーショックを受ける時があります。また八重山の石垣島の人が、同じ八重山の西の果てにある与那国島へ行くと、「八重山から来たのですか？」と言われて、石垣人もまたカルチャーショックを受けて帰ってくるんですね。



これくらいの広がりのある地域に島々が点在するものですから、言葉も違ってきます。例えば沖縄では「いらっしゃいませ」を「めんそーれ」と言いますが、石垣島だと「おーりとーり」、宮古島だと「んみゃーち」と言います。全く言葉が違います。

また家の造りでも、屋敷から家に入る所にある目隠しの屏風みたいな壁を沖縄では「ひんぷん」と言いますが、竹富島に行くと「まいやし」、さらに渡名喜島に行くと「そーんじゃき」と言いまして、言葉が全く違うのです。この言葉の多様性が非常に重要ではないかと思っています。

島々の言葉が共通化されていきますと島の景観をはじめいろんなものが標準化、平準化してしまうのではないかと思います。今言葉が違うということは、島の暮らしや文化が継承されているし価値を持っている。これがひいては島の個性ある景観をつくっているのではないかと私は考えています。

それでは渡名喜島の事例に入ります。サブテーマは「伝建・島懇（しまこん）の島」というふうに書いています。

これが渡名喜島ですね。沖縄には珊瑚礁で出来た平べったい島と標高が高い島とがあります。竹富島は平べったい島で、この渡名喜島は山がちな島です。もともと二つの島であったのが、砂州で一つに繋がったと伝わっています。砂州で繋がれた砂地に集落が形成されています。

かつてこの集落は４つの血縁集落から成り立っていました。山の上にその当時の血縁集落、「マキヨ」と言うのですが、それが４つあった。これが何時の時代か一つにまとまって、砂地の平地に降りてきて現在の集落を形成しています。

渡名喜島は那覇から約 60ｋm西の方にある小さな島です。久米島、粟国島（あぐにじま）、慶良間諸島からなる三角形のちょうど真ん中にある小さな島です。

琉球王国時代、渡名喜島は狼煙による首里城への重要な伝達ルートになっていました。御冠船（うかんせん）など、中国からの船がやってくるときには情報をいち早く首里に伝えて、その間に首里城では歓待の準備をする、あるいは外敵への備えをする、そういうネットワークの一環を担っていました。

集落は全体がフクギの屋敷林に包まれています。島の西の港から東の浜まで歩いて 10 分ほどの大きさで、人口 500 人弱の小さな島です。

渡名喜集落は平成12年５月、今から10年前に重要伝建地区に選定されました。

集落域から伸びているこの部分は「里御嶽（さとウタキ）」です。ここは先ほどの４つの「マキヨ」のうちの一つの血縁集団が住んでいた場所です。４つの「マキヨ」のうちの中心的な集落だったんですね。現在でも島で一番の拝所となっています。

ですから伝建地区の範囲としては集落域と島で一番大切な御嶽を含めて設定したということになります。

集落は全体がフクギの屋敷林で囲われています。今回沖縄から小豆島に来る途中、せっかくですので直島、男木島、女木島を駆け足でまわってきたのですが、女木島の「おおて」と呼ばれる石垣を見て渡名喜島のフクギの屋敷林との共通点を感じました。非常に風の強い所で、防風機能と防砂機能を備えたものだという点は共通していると思います。

渡名喜集落の最大の特徴は「掘り込み屋敷」です。非常に珍しい集落形態だと思うのですが、道路よりも屋敷をわざと掘り下げて、そこに家を造っています。砂地だからこそ出来るわけですが、これは台風対策です。石垣を築いたり屋敷林で屋敷を囲むより以前に、砂地の敷地を掘り下げて暴風対策をしたということです。

というのも、フクギは自生の北限が八重山諸島までの植物なのです。ですから沖縄本島に近いこの島にフクギが今沢山あるのは人為的に導入されたからです。植物の専門家によると一番古いもので二百数十年だそうで、その頃に導入されたと思われます。従いまして、その頃はフクギの屋敷林はない。せいぜい海岸植生の背の低い「アダン」が生い茂っていた。

そういう環境の中で厳しい暴風を避けるために、１m前後屋敷を掘り下げています。こういう大きな特徴でもって、平成12年に重要伝建選定になりました。

屋敷を取り囲む石垣にも特徴があります。ただ現在残っているのは非常に立派な石垣のみで、「あいかた積み」と言い、珊瑚石灰岩をお互いかみ合わせてしっかり造っています。それとは別に一般の家では平珊瑚を「野面（のづら）積み」にした石垣がメインだったのです。ところがその石垣は今から30～40 年ほど前に行われた失業対策事業でほとんどがブロック塀に変わりました。ただ屋敷が掘り込みのため、屋敷内部の内石垣は平珊瑚の石積みがまだよく残っています。

それから白砂の道です。集落外周を取り巻く村道は舗装されていますが、集落内の道は皆白砂の道で舗装していません。　この白砂の道もよくよく考えてみるといろんな意味があったと思います。
この島は毒蛇ハブでも有名です。夜間ハブが出ると白い砂の道だとすぐ目につく、そういう安全管理上の知恵もあったと思います。それから満月の夜などは白い珊瑚の砂の道が照らされて非常に明るく、外灯が無くても夜道が歩ける、そういう意味もあったと思います。

これが 1950 年代の渡名喜の集落です。これが「ヒデーク」というテーブル珊瑚（平珊瑚）を積んだ石垣ですね。また、この島はかつて山の頂上まで段々畑がありまして、今でも石を積んだ段畑の跡が残っています。
今でこそ人口 500 人弱の島ですが、ピークの時には 1500 人ほどの人口をかかえていました。農業と漁業の半農半漁の島なのですが、山の上まで畑を作ってイモを植えていました。
近年この段畑を活用しようという動きがあって、今、段畑の一部を使って薬草などを植えたりしているところです。

これが伝統的な家屋です。先ほど言いました「ソーンジャキ（＝ひんぷん）」があります。沖縄の伝統的な住宅には玄関がありません。そのため屋敷に入ると目隠しの役割も果たしますし、風や砂が直接入らないような役割もあり、もちろん邪気除けでもあります。

これが渡名喜の村並みです。フクギの屋敷林と白砂の道、そして赤瓦屋根を漆喰で固めた景観というのは今でこそ美しいと思うのですが、この小さな島で生存していくための知恵がこういった景観を形づくっていると感じます。つまり、沖縄の自然、亜熱帯の自然というのは非常に穏やかで豊かだと言いますけれども、一方で非常に厳しい自然でもある。毎年暴風雨が来るし、晴れが続くと干ばつになる、ハブもいます。そういう厳しい自然の中での知恵と工夫がこういった景観を形成していると非常に感じます。

伝建事業と言いますのは保存だけではなくて活用しなくてはいけません。

伝建選定後、この島では民宿や食堂ができました。今までは食堂がなく、民宿はいくつかあったのですが、それらが新たに加わりました。また、空き屋や廃屋といったものを、伝建の修理基準に準じて伝建と同じように整備しました。それは「島懇（しまこん）」という事業で行いました。なかなか馴染みがない事業だと思うのですが、正式には「沖縄米軍基地所在市町村活性化特別事業」と言いまして、三年間の時限的事業でした。

この事業を使って空き屋･廃屋を伝建物と同じように８件､主屋と付属舎を合わせて 14 棟を整備し、島食堂、民宿、あるいは管理事務所ということで活用しております。

エコカーも島懇事業で導入しました。太陽光を利用して充電するバッテリーカーなのですが、10 台導入していて非常に人気があります。先ほどの山がちな林道をぐるっとまわることができます。

これは集落内のフットライトです。

渡名喜島は星空が非常に綺麗な島でして、民宿の屋上で明け方までずっと星空を見て過ごした県外からの客もいるくらいです。そうした中で、これまで集落内にあった外灯を、集落内からも星空が見えるように低くしようという事になりまして、上から照らすこれまでの外灯をフットライトに替えたのです。これも島懇事業でやりました。

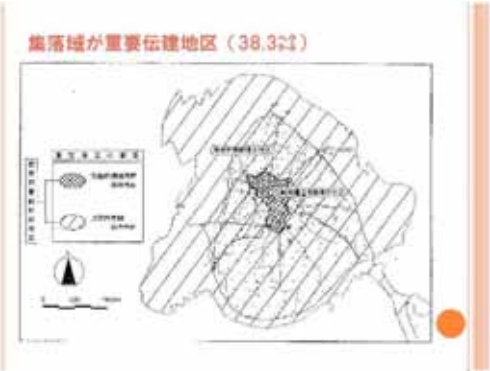
ただ整備されたフットライトは光が上にも漏れていて本来の目的を十分果たしていません。そこで、今このフットライトに帽子をかぶせようということで、渡名喜島の小中学生にアイデアを出してもらっているところです。

島懇事業では役場が建物を所有者から 25 年の長期契約で借り受けて整備し、これを民間の事業者に管理運営してもらっています。やはり行政だけではなく、島の事業者と一体となって島の経営をやっていくということが大切だと思います。今は「美ら島（ちゅらしま）づくり推進委員会（仮称）」という形で取り組みを始めています。これは行政と事業者が中心となって漁協、生活改善グループの女性パワー、社協などを含めて一つの横断的な島を活性化する協議組織を創り出している所です。

この渡名喜島が重要伝建地区選定になって 10 年になるのですが、徐々にではありますが色々な取り組みを始めていまして、これからの動きが注目される島の一つだと思っています。

次に竹富島です。

竹富島のサブテーマは「島民自治の島」です。皆さんご存じの方も多いと思いますが、県内ではずば抜けて、あるいは全国的に見ても非常に自治能力の高い島だと思っています。



竹富島の集落は昭和 62 年に重要伝建地区に選定されています。県内では第 1 号、全国では 24 番目です。現在、全国で 90 件近い重要伝建地区があると思うのですが、そのうちでも早い方でした。ちなみに渡名喜島は県内第 2 号で、全国では 55 番目でした。

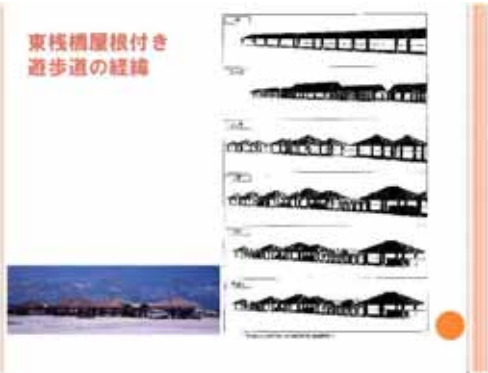
竹富島の自治の仕組みだけ少し説明しておきたいと思います。重要伝建地区選定と同時に、島では調整委員会という島独自の事前協議組織を立ち上げています。

島の中で家屋等を新築または増改築しようとする場合、行政に直接話が行くのではなくて、まずは島の調整委員会に話をもっていきます。そこで、入口の位置や屋根の形態・素材、建物の高さなどを島の中で調整するわけです。

ただ調整委員会と言っても各地区の代表が集まった組織ですので、手に負えないような専門的な問題が発生しますと、専門の先生達が加わった伝建保存審議会に諮ります。島全体に及ぶ大きな問題になると伝建保存審議会で答申した方向性を参考に、最後には自治公民館議会で議決し、最終的にはそれを島の総会にかけて承認をもらうという仕組みになっています。

この図は伝建保存審議会に諮り計画内容を修正した経緯です。港の屋根付き歩道なのですが、国の施設です。最初に出てきた案がおかしいということで審議会にかけまして、修正を重ね、最終的にはこの修正案で造られました。

このような形で、島の人々が景観的な問題に直接的に係わってきて、判断してきたという経験の積み重ねがあります。



港の件については反省点も一つあります。

もちろん当初案よりはずっと良い最終案なのですが、この施設は港にあるのです。伝建集落というのは島の真ん中にあるわけです。伝統的な集落景観を集落の外に出して造る事に対して、本当にそれでいいのか、本物は集落内にあるべきで、港は全く別の価値観でデザインしても良かったのではないかという反省もあがったわけです。

このことは10数年前の出来事でありますが、今回直島や男木島、女木島の港の景観を見た時に、やはりそういうこともあるのかなと思って、これからの議論の課題でもあるなと思った次第です。

島の自治力の例としてもう一つ、集落内交通の件です。

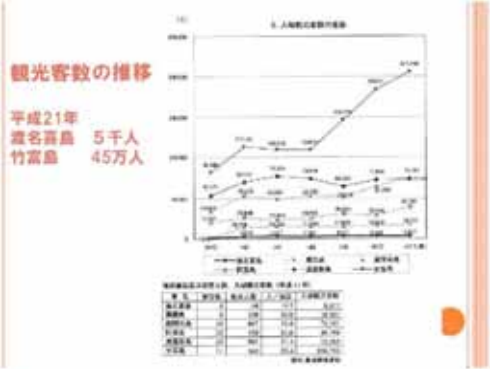
重要伝建地区に選定されてからお客さんが大分増えました。石垣島から船で 10 分と近いので日帰り客が主体です。港からマイクロバスに乗せて島の各地を案内するわけですが、この島は放射状道になっているのでどこへ行くにも島の中央に位置する集落を通らないといけないのです。そうすると集落の白砂の道が車で踏み固められてしまい、雨の日には轍になって水たまりになるし、晴れの日が続くと砂埃になる。さらに毎朝箒目を入れた家の前の白砂の道がマイクロバスによって消されてしまう。観光客からもゆっくり散歩したいのに車を気にしながら歩かないといけないといった苦情がよせられる。ということで、お客さんは増えたものの集落の魅力がどんどん低下していったわけです。

それに対して島の人達は、集落の魅力は壊したくない、しかしお客さんは増やしたい、ではどうすればよいかということで色々考え、最終的に集落の外周に車専用のサービス道路をつくる決断をしました。車はできるだけ集落内を通過しないような島独自の交通システムをつくったのです。

ルートを決めるのにも色々と工夫があるわけです。まず集落の３つの地区の案をそれぞれの地区がつくり、それを持ち寄って今度は集落全体の案、すなわち集落統一案を決めます。そして行政や我々専門家と協議する中で整備方針を明確にしながら統一案を修正していったのです。伝建地区の範囲を切らないようにするだとか、まつりの道を切らないようにしようだとか、色々決めるわけです。できるだけ地籍の境界線を通るようにするとか、そういうことを決めていった。そして最終的にまとまった案を先ほどの公民館議会にかけて、総会で決定するわけです。

この外周道路は実現しています。計画から実現までが非常に早い。しかも実現すると島の人達はこれを自分のものという意識でいますから、ちゃんと管理をやっていますね。

これによって観光客の数もさらに増えました。当初のねらいを実現したということになります。



観光客が増えてくるといろんな問題・課題が出てくるわけですが、観光関係の住民と、観光に関係してない住民とで、経済的な格差や利便性の制約など、色々な差が出てこないかという事があります。

これに対してこの島では、自治公民館に収めるお金を観光業者はランクをつけて、半分くらいは観光業者で負担し、残り半分を各世帯で均等割にしています。観光業者は二重払いになりますが、それで差をつけて観光に関与していない人たちも間接的に観光の恩恵を受ける仕組みをとっています。そういう仕組みも全部自分達で考えて実行しています。

最後になりますが、景観島づくりを考える場合、島の自然・文化・歴史に立脚していくことが重要と思います。そして、大切なのは島のスケール感を壊さないことだと思っています。

また、持続可能な島づくりということになると、これは島の自治力と不可分だろうと考えます。基本的には島の自治能力を高めていく中で、自然・文化・歴史に立脚した地域をつくっていく必要があります。ですから先ほどの独自の言葉にしても、自然や文化にしても、島の生業にしても、それを島の基調として活かしていくことが大切だと思います。

ただそれは島の中だけで完結するのではなくて、いろんな外部の人の知恵や力を大いに活用していく必要があります。竹富島はそういった外部の力をうまく借りる能力が非常に高いという事もあると思います。

時間となりましたので、以上で沖縄からの報告とさせて頂きます。ありがとうございました。

司会：

ありがとうございました。長崎の佐保さん、沖縄の前原さんとお話し頂きました。質問を含めて、最後にまとめて皆さんと具体的にお話も進めていきたいと思います。ここで休憩をとります。

■小豆島の自然と風物　（久留島克彦）

ただいまご紹介頂きました久留島です。これから難しい話は抜きにして、小豆島の魅力をほんの一部ですけど用意した写真を、説明を交えながら紹介していきたいと思います。

小豆島　7

小豆島本島は土庄町と小豆島町の２町で形成されておりまして、あとは豊島というのが離れてあります。

小豆島は牛の形をしていて、この会場はちょうど頭の付け根あたりに位置しています。

寒霞渓　ロープウェイと紅葉　渓谷美　4

小豆島というと皆さんやはり自然を思い浮かべると思いますが、冒頭でご紹介があったように、非常に標高が高い山と周りの海とで構成されております。

国立公園の第一号に瀬戸内海国立公園が制定されましたが、その中心的な役割を果たしている寒霞渓という所があります。

寒霞渓　ロープウェイと紅葉　渓谷美

今はロープウェイがついていますが元々は下に遊歩道が走っていて、その遊歩道沿いに表十二景があります。

寒霞渓　石門　寒霞渓八景

それから石門洞（せきもんどう）と言う所がありまして、ちょうど石に穴が空いているので石門と呼んでいるのですが、これは裏の八景の一つです。
ですから、表裏合わせて全部で二十景の見所があるということです。

銚子渓　銚子滝

土庄町から寒霞渓へ寄った辺りにある銚子渓には、銚子大滝という島では一番大きな滝があります。

銚子渓　お猿の国展望台　8

その銚子渓の山の方に「おさるの国」というのがあるのですが、一番上に展望台がありまして非常に眺望が良い所です。夕日が沈む頃にはお猿が皆夕日を見に上がって、夕日が沈んだらねぐらへと帰っていきます。

滝宮　9

銚子渓から今度は海の方へ少し降りると丘陵地帯がありまして、これは滝宮（たきのみや）という所ですが、田圃や畑があり、夕日の見所でもあります。半島のあたりに夕日が沈むと非常に綺麗です。

小瀬　重ね岩からの展望　10

これは先ほどの牛の頭のちょうど鼻先のあたりにある小瀬という【部落】の重ね岩（かさねいわ）という場所からの多島美、眺望です。

小豆島の東側には淡路島がありますが、小さな島はだいたい西側付近に集中していまして、これはちょうど土庄の一番最西端からの眺望です。

戸形　鯉のぼりと夕日 11

隣に戸形（とがた）という所がありまして、５月の鯉のぼりのシーズンには鯉のぼりを海に渡します。四万十川の鯉のぼりに対抗するわけではないですが、海と鯉のぼりの景観は見所です。

千軒　瀬戸大橋と夕日 12

さらに隣に千軒（せんげん）という所があるのですが、そこから見る瀬戸大橋です。上手くいけば真ん中に《夕日が？》落ちるそうです。何回か行くのですが、曇っていて丸くきちんと見えなかったりと、なかなかど真ん中に綺麗に夕日が落ちません。

小江　漁村寸景 14

小江　漁村寸景 15

肥土山　虫送り 16

続きまして、風物や伝統行事をご紹介します。

先ほどの滝宮丘陵地帯から海の方へ降りますと、赤海老やシタビラメを干している場面に会います。シタビラメのことをこの地区ではゲタと呼んでいるのですが、下駄に似ているからかどうかわかりませんが、12 月頃からゲタ干しが始まります。

ここはちょうど歌舞伎の舞台なのですが、水田の間をくぐり抜けて約１㎞ちょっとくらい、豊作を祈願して虫送り行事が行われます。

現在小豆島では肥土山地区でだけ残っています。数年前までは隣の【中山地区】まで残っていたのですが、現在は行われておりません。

肥土山　2010年歌舞伎舞台の修理 18

先ほどの農村歌舞伎の舞台ですが、今年 30 年ぶりぐらいに屋根の葺き替え修復が行われました。

肥土山　歌舞伎衣装の虫干し 19

これは秋９月に地元の婦人会とか老人会の方が手伝いまして、歌舞伎の衣装を虫干ししている風景です。

肥土山　5月3日農村歌舞伎 20

農村歌舞伎の本番は５月３日に行われます。隣村の中山地区では先日 10 月 10 日に、中山の農村歌舞伎が行われました。小豆島で現在残っているのはこの肥土山と中山の２箇所ですが、昔はこういう舞台が地区ごとに結構ありました。一部は土庄町から香川県の四国村に移築され、そちらでも歌舞伎を上演しております。

今はちょうど秋祭りの１週間でして、先ほどの歌舞伎の 10 月 10 日に始まりまして、今日は池田の秋祭りが午前中から行われています。

福田秋祭　10月11日　小部の獅子舞 21

その中の一つ、福田の秋祭りです。本来であれば土庄の祭りに参加するはずの土庄の小部地区がどういうわけか福田の秋祭りに参加しておりまして、その中でも有名なのがこの大きな獅子舞です。小豆島に獅子は４つあるのですが、その中でも一番最大の獅子です。

伊喜末神社秋祭　10月13日 22

13 日には先ほどの漁港の近くの伊喜末神社で秋祭りが行われます。太鼓台がいくつか出るのですが、上が社みたいになっている太鼓台はこれだけです。

伊喜末神社秋祭　10月13日 23

神社に奉納した後、下り坂になっている所を駆け下りてくる様子です。砂埃が舞っているような所を駆け下ってくるので非常に危ない祭りですね。

伊喜末神社秋祭　10月13日 24

広場に戻りますと、今度は喧嘩太鼓で太鼓台同士がぶつかり合います。ぶつかり合うだけなら良いのですが、これがぶつかって連結したまま走るということで、非常に怪我人も多い祭りです。

土庄　秋祭　10月14日 25

土庄　秋祭　10月14日 26

１４日になりますと土庄の八幡さんの秋祭りがあります。先ほどの伊喜末地区の八幡さんに比べて、太鼓台が全体に大きいものが多いです。

特徴としては、乗り子の頭に頭巾を被っていまして、このような頭巾を被っているのは池田の一部と、この近隣では女木島の祭りでも被っています。

渕崎　宵祭　10月14日 27

またこの日は 15 日にある渕崎の宵祭ということで、それぞれ提灯を点けた太鼓台が土淵海峡の端にずっと並び、非常に綺麗な夜景になります。

渕崎　秋祭　10月15日

15 日は渕崎地区と、小豆島町の内海地区の祭りがあります。

土庄町合併50周年秋祭　2005.10.9

これは今から５年前、2005 年の 10 月９日に土庄町の合併 50 周年記念行事で太鼓台が集合したときの様子です。だいたい 30 台くらいの太鼓台がありますが、小豆島町でも同じく集めると 30 台以上ありますので、もう人口が減って出せない地区もありますが、この小さい島全部で 70～80 台の太鼓台があることになります。

土庄町合併50周年秋祭　2005.10.9

集合後、広場に集まりまして、真ん中で各地区の「かき競べ（くらべ）」をしました。

池田　秋祭　押し込み　10月16日

今日 16 日の午前中は池田の秋祭りで、こちらは一地区だけですが船に積んでいます。昔はこういう形で何地区も祭りに参加していたのですが、今は道路が整備されましたので、１件だけ【神浦地区】という所にこの伝統行事が残っております。

舳先のところで踊っている踊り子が２人いまして、揺れながら来る船の上で踊るということで、非常に見物客の多い祭りです。

池田　秋祭　かき競べ　10月16日

そのクライマックスですが、池田の各地区がこの広場に集結しまして、長いこと差し上げられた所が勝ちというかき競べをしています。今日の３時頃です。

内海　秋祭　10月15日

小豆島町では昨日 15 日に祭りが終わりまして、私も参加していたのですが、ここの特徴としては、太鼓台の下に左右２人ずつ入ります。太鼓台が落ちるとその隙間は 20㎝ も無いくらいになるので、間違いなく大けがをします。この内海地区だけが太鼓の下に潜り込んでかつぎます。

24の瞳映画村分教場 35

次に観光ですが、非常に有名な二十四の瞳の舞台となった映画村の分教場です。

オリーブ公園 36

一昨年に植栽100周年を迎えたオリーブを中心としたオリーブ公園です。

醤の郷　醤油蔵 37

それから冒頭で最近は産業観光というのが見直されているという話がありましたが、これは小豆島町を、特に昔からの醤油村が多いということで、「醤（ひしお）の郷」と命名しまして、商工会を中心に、町が最近になって景観都市条例をつくるという形で動いています。

醤の郷　醤油蔵内部 38

その内部にはこういう杉樽の直径２ｍくらいの樽が並んでいて、全国にある樽の半分以上が小豆島に現存しております。

エンジェルロード　展望台 39

昨年度テレビ放映されて非常に有名になった土庄地区のエンジェルロードの展望台です。潮が引いたときに島がつながるので、干潮時に渡れるということで有名になり、最近非常に注目を浴びている観光スポットです。

以上早く走りましたけれども、また後ほど説明不足な点がありましたらご質問よろしくお願いします。ありがとうございました。

エンジェルロード 40

司会：
ありがとうございました。小豆島の方には見慣れた風景かもしれないですけれども再度写真で見て頂いて、美しさを再確認していただければと思います。
続きまして、香川県庁の安西課長補佐から瀬戸内海の景観づくりの重要性とその方向性について報告頂きます。

■瀬戸内海の景観を守り育てる　（安西慎）

香川県土木部都市計画課の安西慎です。本日は、香川県が今年の 3 月に策定しました「瀬戸内海景観ガイドライン」について報告をさせていただきます。

その前に久留島先生のお写真出て参りましたけれども、小豆島の祭りの写真が多くご紹介になられていたかと思います。祭りが盛んなところというのは、地域というのがわりと活性化しているのかな。もう一つのアクセルとして景観というものを考えられないか、というところを今日はご説明させて頂きたいと思います。

それでは最初にガイドラインの説明に先立ちまして、ガイドライン策定の背景や景観についての考え方をお話しさせていただきたいと思います。

まず、このガイドラインの策定にあたり、住民の方や観光客など来訪者の方に対するアンケート調査を昨年１１月に実施しました。住民アンケートでは、約４千名に調査票を送付し、約千九百名から回答がありました。回収率は約４７％と大変高い数字で、瀬戸内海の景観に関する関心の高さが伺えました。

また、来訪者アンケートでは、高松―土庄、高松―宮浦などを結ぶフェリー船内や、草壁港、池田港などの港で約九百名からアンケート調査を実施しました。

前のスクリーンをご覧ください。そのアンケート調査の結果から２、３お話しさせて頂きます。アンケートは今からお話する以外にも色々聞いていますが、その中から絞ってお話しさせて頂きたいと思います。

まず、「瀬戸内海の景観に魅力を感じますか」という質問に対しては、住民、来訪者とも９割以上の人が魅力を感じると回答しています。

また、「瀬戸内海の景観を守る必要がありますか」の問に対しては、住民、来訪者ともほぼ全員の人が必要あると回答しています。これは、多くの人が瀬戸内海のすばらしさを認識し、それを守り続けたいという希望のあらわれだと思います。

次のスライドは少し気になったアンケート結果です。

住民の方に「島は好きですか」「島に誇りが持てますか」という２つの質問をしました。

「島が好きですか」には、約７割の人が好きだと答えていますが、「誇りを感じていますか」には約５割の人しか誇りを感じていません。これは言葉のニュアンス、感覚の違いもあって、こういう質問が出れば必ず「好きです」という回答の方が高い回答になるのは当然なのですが、この２割の差が大きいか小さいかはわかりませんが、実はこの２割の差が、住民主体のまちづくりには大きく影響すると考えています。そして、この差を埋めるものが「景観」でないかと考えています。

また、次のスライドは住民の方と来訪者の方に「島に魅力を感じますか」という同じ質問をしました。
住民の方は約５割の人しか島に魅力を感じていません。これは、島という条件が不利な地域に済んでいて不便な生活をしているという思いがあるのかもしれません。しかし、来訪者の方は約８割の人が島に魅力を感じています。
島の生活は不便な所もありますが、その生活を含めた風景そのものに来訪者の方は魅力を感じている面もあると思います。
この差を少しでも埋めるのも景観づくりによる活動ではないかと思います。

つまり、景観づくりは、自分たちのまちのすばらしさを気づかせてくれ、まちに誇りが持てるようになるひとつのツールでないかと考えています。そして、まちに誇りをもつことで、住民が景観づくりやまちづくりに参加することで人やまちが元気になり、地域コミュニティが活性化する、それが景観づくりの本当の目的ではないかと考えています。
先に、今日の結論を言ってしまいますが、自戒をこめて言いますと、景観づくりといえば、色の規制はどうかとか、高さの制限は、といった規制の技術論に偏りがちになる傾向があります。
それが不要だと思いませんが、景観づくりで一番大切なことは、自分たちのまちのすばらしさに気づき、まちに誇りを持つことができる。そして、それを住民主体のまちづくりにつながる一つのスタートにする。私は、それが、景観づくりの担っている一番大切な目的だと考えています。

●住民や来訪者が選んだ景観（小豆島）

土庄町住民		小豆島町住民	小豆島への来訪者
小豆島	豊島		
1. 浜辺（エンジェルロード・小瀬鼻岸など） 2．祭りのにぎわい（秋の太鼓祭りなど） 3．島四国八十八箇所霊場 4．肥土山農村歌舞伎 5．オリーブの木 6．高台からの眺め	1．古井戸や水路（唐櫃の清水） 2．高台からの眺め 3．田園風景（唐櫃の棚田） 4．寒霞山などの風景 5．鎮守の森（皇崎権現のスタジイの森） 6．浜辺（宮の浜・神子ケ浜など）の風景	1．寒霞渓周辺 2．祭りのにぎわい 3．島四国八十八箇所霊場 4．二十四の瞳映画村と岬の分教場 5．浜辺（オリーブビーチ・白浜海岸など）の風景 6オリーブの木。	1．寒霞渓周辺 2．二十四の瞳映画村と岬の分教場 3．高台からの眺め 4．浜辺（オリーブビーチなど）の風景 4．浜辺（エンジェルロードなど）の風景 6．オリーブの木

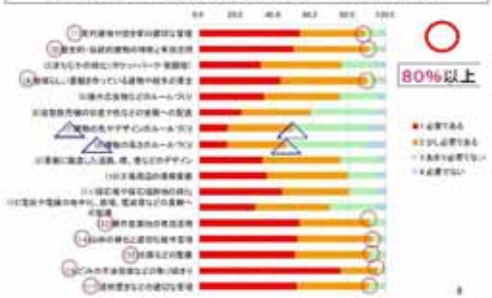
次は、住民や来訪者が選んだ好きな景観です。寒霞渓やエンジェルロードなどの名所もありますが、高台からのながめや浜辺、祭りなどの身近でなじみ深い風景なども選ばれています。

●住民や来訪者が選んだ景観（直島）

直島町住民	直島への来訪者
1. 浜辺（琴反地海岸・つり公園など）の風景	1．本村家プロジェクト
2．祭りのにぎわい（本村八幡神社秋季大祭など）	2．地中美術館周辺
3．神社・鎮守の森（八幡神社など）	3．浜辺からの眺め
4．浜辺からの眺め	4．高台からの眺め
5．高台からの眺め	5．伝統的な集落
6．伝統的な集落（本村など）	6．屋外にある芸術作品

次の直島町でも同じ傾向がみられます。

●景観づくりに必要な取り組み（3町住民合計）



次は、住民が考える景観づくりに必要な取組みです。老朽家屋や空き屋の対策、耕作放棄地、ゴミの問題には意識が大変高く表れています。これは現状が目に見えるからでしょうか。

感心の低い所から二つ選んでみると、先ほどの話とも関連してきますが、（建物の）色やデザイン、高さ、景観に関するルールづくりについては意識が低い状況にあります。

以上がアンケート調査の結果です。

それでは、お配りしている瀬戸内海景観ガイドラインについて説明させて頂きます。まず、ガイドラインの構成ですが、

１.ガイドラインの位置づけ
２．瀬戸内海の景観のすばらしさ
３．瀬戸内海の景観づくりの基本理念・目標
４．景観づくりの指針
５．景観づくりの取組み
７．景観づくりから住民主体のまちづくり

の７つの章で構成しています。

本日は時間の関係もありますので、その中からいくつかの項目にしぼって説明をさせていただきます。特にお話しさせていただきたいのは、瀬戸内海の景観のすばらしさであり、それに気づき、自らの地域に誇りをもって、まちづくりに取り組んで行くことが、地域と地域コミュニティの活性化につながるということです。

まず「１．ガイドラインの位置づけ」についてです。

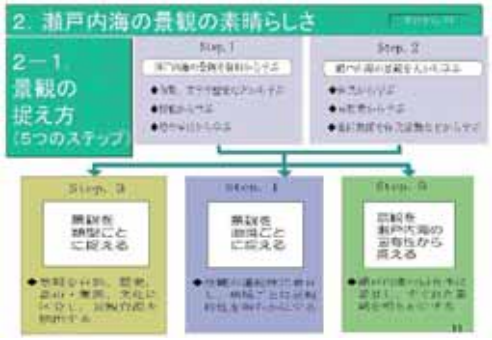
このガイドラインは、平成１９年に策定した香川県景観形成指針をうけ、作成した香川県の瀬戸内海の景観に関する指針です。

背景としては、昨年８月に国の「四国圏広域地方計画」が策定され、そのプロジェクトの一つである「瀬戸内フィールドミュージアム」の中で瀬戸内海の景観保全が位置づけられた事に連動しています。

このガイドラインの目的は３つあります。一つ目は、瀬戸内海の景観づくりの重要性や方向性を示すこと。二つ目は、市町が策定する景観づくりの方針やルールなどの基本的な考え方を示すこと。そして、三つ目は、景観づくりから地域コミュニティの活性化を目指す方向性を示すことです。

この三つをガイドラインの目的としています。

また、このガイドラインの対象地域は香川県の瀬戸内海全域ですが、特に小豆島、直島周辺をモデル地域にして重点的に記載しています。



次に、瀬戸内海の景観の捉え方です。

ガイドライン４頁ですが、ここでは資料と人からによる２つの「学び」と３つの「捉え」という５つのステップから景観を捉えています。ここでポイントになるのは、３つの「捉え」の最後にあたりますステップ５です。

工学的には、通常、景観を類型ごと、あるいは地域ごとに捉えますが、瀬戸内海はそれだけでは、把握しきれないすばらしさがあります。そのため特別に追加させて頂いたのがステップ５です。「瀬戸内海の固有性から捉える」ということを追加しました。

まず、ステップ１の「資料から学ぶ」です。

一つ目が「和歌、文学などから学ぶ」です。古くから瀬戸内海は、人や物の交流の拠点として栄えていました。多くの和歌や文学の中にも、瀬戸内海のすばらしさが表現されています。二つ目が「校歌から学ぶ」です。小学校や中学校の校歌にもすばらしい景観が歌われています。三つ目が「絵や写真から学ぶ」です。昔から絵も多く描かれ、写真も多く撮られています。

まず、一つ目の和歌、文学から学ぶです。

古くは柿本人麻呂の和歌やシーボルトの紀行文にその瀬戸内海の美しさが表現されています。

現代では、映画にもなった、やはり壺井栄の「二十四の瞳」でしょう。「海の色も、山の姿も、そっくりそのまま、きのうにつづく今日であった。」とあり、瀬戸内海の美しさが、過去から未来へと永遠に続くことを印象的に表現しています。

つぎに、二つ目の「校歌から学ぶ」です。

小中学校や高校の校歌には、郷土の風景や思いをあらわす言葉が含まれています。「双子の山」や「壇の山」、それから「千軒の磯」や「鹿島の磯」などが歌われています。

次に「絵や写真から学ぶ」です。右下は、今日見学会で配られた資料にもありましたが、江戸時代の画家、松川半山（はんざん）の絵です。当時と今を写真で比較しています。

また、上は小豆島在住の画家の絵、下は同じく在住の写真家の写真ですが、自然にとけ込んだ集落や信仰の様子、高台からの風景が描かれています。

つぎにステップ２の「人から学ぶ」です。

まず「住民から学ぶ」ですが、はじめに説明をしましたが昨年１１月に実施した住民アンケートの結果をまとめたものです。

子どもたちに残したいと考えている景観は何かという質問に対する答えです。ここからわかるのは、観光地等の有名な景観だけではなく、「高台からの風景」や「神社」や「鎮守の森」「まつり」「オリーブの木」などの身近な景観を考えています。

また「来訪者に学ぶ」では、「観光地や高台からの眺め」等を大切にしたい景観と感じていますが、住民が大切にしたいと感じている神社や鎮守の森などは、来訪者にあまり知られていません。

また「美術の先生などから学ぶ」では、瀬戸内海の海の色は何色に例えられるかと質問したときに、オリーブの葉の裏の色とか翡翠色に例えたり、フェリーからの眺望や高台からの眺めが好きな風景としていました。

また、住民団体は地域に愛着をもって活動していますが、ここでも後継者不足が大きな問題と考えています。

次にステップ３です。２つの「学び」から景観を類型ごとに捉えました。

「自然の景観」「歴史的な景観」「都市・集落の景観」「文化的な景観」の４つにわけて捉えています。

まず「自然の景観」では「名勝」の寒霞渓、それから「海岸」は、ここではエンジェルロードをお見せしています。それから「島なみ・半島・岬」「山なみ」があります。

次に「歴史的な景観」では、大阪城の石垣石切丁場跡などの史跡、それから「寺社」、他にも桟敷やシシ垣などがあります。

また「都市・集落の景観」では、島の特徴でもある玄関口でもあります「港の景観」、それから迷路のまちなどの「まちなみの景観」、さらに「農山漁村の景観」があります。

また「文化的な景観」では、「信仰上の活動から生まれた景観」として島遍路（へんろ）、それから「生活から生まれた景観」として千枚田など、その他に「伝統的な風習」として虫送りや歌舞伎などの伝統行事があります。

次にステップ４です。景観を地域ごとに捉えました。

まずモデル地区を大きく２つのエリアに分けました。小豆島を中心としたエリアＡ。ダイナミックで独立した景観です。また、直島諸島、豊島を中心としたエリアＢ。多島水道で変化に富む景観です。

さらにエリアＡは４つに分けて、景観を地域ごとに捉えました。

Ａ－１ゾーンでは「湾と湾を囲む稜線」、それと「土庄と池田の市街地」が地域の景観を形作っています。

またＡ－２ゾーンでは「星が城山（ほしがじょうさん）」「寒霞渓」「三都半島（みとはんとう）」「湾を二つにわける岬」「内海の市街地」などが景観をつくっている大きなポイントです。

　またＡ－３ゾーンでは「南北に長い海岸線」「急峻な山」「東に広がる大海原」が地域の景観を形作っています。

　またＡ－４ゾーンでは、「皇踏山（おうとうざん）」「東西に長い海岸線」「土庄港と土庄の市街地」が景観をつくっている大きなポイントです。

同様にエリアＢでも２つのゾーンにわけ、地域ごとの景観を捉えています。

次にステップ５として、景観を瀬戸内海の固有性から捉えました。

瀬戸内海は、四国側からも本州側からもみられる３６０度開かれた景観です。また、地域には本物の景観が残っています。そのような特性を踏まえてまとめてみました。

まず、万葉の昔から多くの歌人に読まれ、シーボルトも絶賛した内海多島の美しさ、島々が重なり合う美しさです。

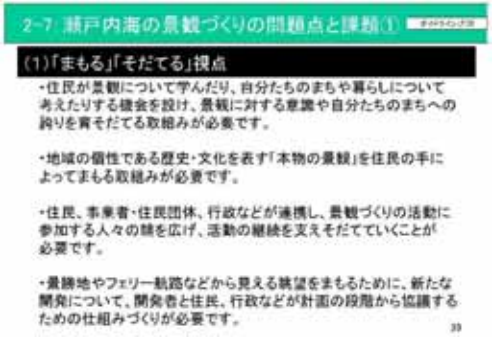
また、フェリー航路からの眺めなど刻々と変化する景観の美しさです。フェリーの航路では横に、島の高台では見えないものが見えてくる縦の変化があります。

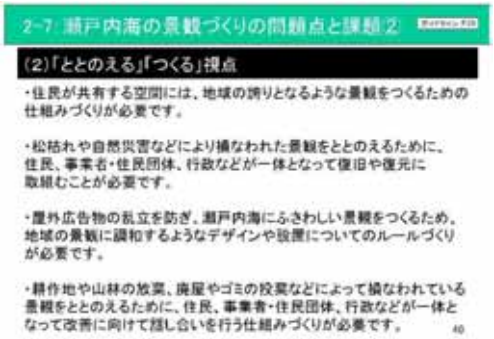
次は、自然と歴史・文化、人々が織りなす「本物の景観」です。

ここでいう「本物の景観」とは、長い歴史の中で変わらない姿をとどめ、他にない個性をもった景観を言います。また、そこに住む人々がその価値を認めた景観です。

最初の鳴海先生のスライドにもありましたが、この石積みなど、なかなか良い景観ですが、来訪者にはあまり知られていない部分があります。

最後は、昼とよるにきらめく景観です。今日もフェリーに乗ってここへ来る時に朝日を受けてきらめく波を見ましたが、凄く良い景観だと思いますし、これから夜にかけてまた違った姿を見ることができると思います。

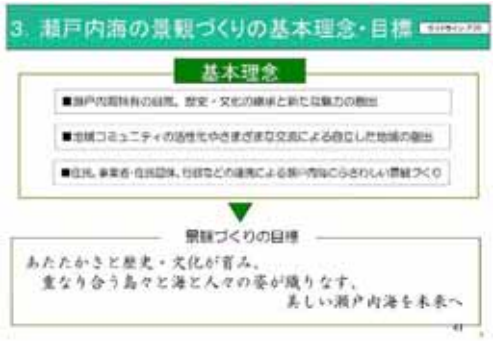




このような景観の特性を踏まえ、瀬戸内海の景観づくりの問題点と課題を**「まもる」「そだてる」視点と、「ととのえる」「つくる」視点からそれぞれ**まとめました。

「まもる」「そだてる」視点では４つほど問題点がありまして、景観への意識やまちへの誇りを育てる取組み、本物の景観を守る取組、活動を継続する取組み、計画段階からの取組みが課題となります。

また**「ととのえる」「つくる」視点**からは、地域の誇りとなる景観をつくる、災害などで失われた景観を整える、景観のルールづくりなどが課題となります。



次に景観づくりの基本理念と目標です。

３つの基本理念として

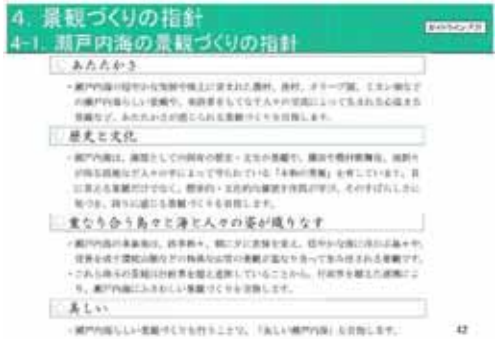
・瀬戸内海特有の自然、歴史、文化の継承と新たな魅力の創出

・地域コミュニティの活性化やさまざまな交流による自立した地域の創出

・住民、事業者、行政などの連携による瀬戸内海にふさわしい景観づくり

を踏まえ、

「あたたかさと歴史・文化が育み、重なり合う島々と海と人々が織りなす、美しい瀬戸内海を未来へ」を景観づくりの目標としました。



次に景観づくりの指針として、「あたたかさ」「歴史と文化」「重なり合う島々と海と人々が織りなす」「美しい」の４つの点から定めました。

まず「あたたかさ」では、穏やかな気候や風土、オリーブ、ミカン、そして人々の交流による心温まる景観など、あたたかさを感じる景観づくりを目指します。

「歴史と文化」では、瀬戸内海や地域固有の歴史や文化の景観、ここにある本物の景観、そしてこれら目に見える景観だけでなく、歴史的・文化的な価値を学び、誇りに感じる景観づくりを目指します。

また「重なり合う島々と海と人々が織りなす」では、四季折々や朝に夕に姿を変える景観。穏やかな海に浮かぶ島々や背景をなす讃岐山脈などは、市町や県の行政界を超えた景観です。瀬戸内海にふさわしい景観づくりを目指します。

そして「美しい瀬戸内海」を目指します。

また、４つの類型ごとの景観づくりの指針や、地域ごとの景観づくりの指針についても、エリアＡ・エリアＢのゾーンごとに分けてガイドラインで定めています。

基本理念や目標や景観づくりの指針をうけて、景観づくりをどうしていけば良いのでしょうか。その一つが景観づくりのルールづくりです。

このスライドは開発行為についてルールがなかった場合の例です。自然公園法や森林法だけでは景観が守れない場合があります。

次は、色に対するルールがなかった場合の例です。

赤や青の原色が少しきつくなります。自分のことだけを考えれば、こうなるのかもしれません。今では、コンビニエンスストアやハンバーガーショップも景観には配慮しています。色に関する景観の意識が高くなってきています。

また、高さに対するルールがなかった場合の例です。前の建物で背後の山が見えなくなっています。京都の五山や倉敷美観地区では建物の高さについての制限が設けられていることで有名です。

このような例を出すまでもありませんが、景観のルールづくりが必要なのではないかと思います。

今日の見学会でもご覧になられたかと思いますが、これはそれよりちょっと上にある中山の方の棚田です。次は棚田からみる景観保全の考え方です。

高齢化や後継者の不足から身近な景観が失われつつあります。これらの景観を守るためには、景観に対する意識の向上や地域コミュニティの活性化が必要です。

次は路地からみる景観保全の考え方です。これは水路を埋め、道路を広げ、ブロック塀に替えています。おそらく利便性だけを追求すれば自然とこうなっていきます。ですから景観に対する価値観を高めて行くことが必要なのではないかと思います。

このような景観づくりの取組みは、住民や事業者、行政が連携して取り組んでいく必要があります。そして、景観を「まもる」「そだてる」「ととのえる」「つくる」を支えていく必要があります。

まず景観づくりでスタートとなるのが、景観法に基づく景観計画の策定です。

景観計画は、景観づくりを総合的に進めるための計画で、景観計画の区域や方針、行為の制限等について市や町が定めます。

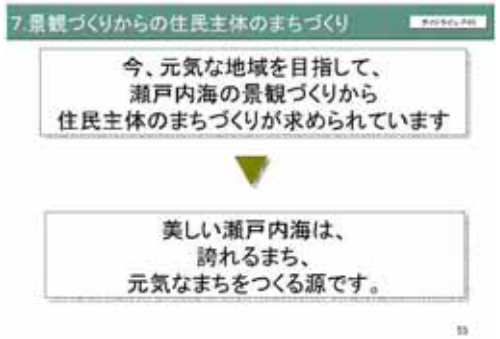
また、景観計画の策定においては景観法で住民が参加することが位置づけられています。これは景観計画策定の体制の例を示しています。

ここで大切なのは住民参加です。アンケート調査やワークショップやタウンウォッチングなどが実施されます。

景観づくりは住民や事業者、行政が連携して取り組んでいきますが、その主役は何と言っても住民です。

景観づくりの第１歩として、県はガイドライン等の指針を示し、シンポジウムを開催します。市や町では景観計画を策定します。しかしそれだけでは景観づくりはできません。住民が主役の景観づくりでは、「学ぶ」「気づく」「考え動く」「誇りと自立」の４つのステップで進んでいきます。それに行政や事業者などは「きっかけづくり」「ひとづくり」「活動の輪づくり」で協力していきます。そして、景観づくりから住民主体のまちづくりがはじまることにつながっていきます。

これは住民主体の景観づくりの一例です。



今、元気な地域を目指して、瀬戸内海の景観づくりから、住民主体のまちづくりが求められています。美しい瀬戸内海は、誇れるまち、元気なまちをつくる源です。

これは「瀬戸内海景観ガイドライン」ですのでこのようになっていますが、きっとすべての人のまわりに誇れる景観、風景があると思います。

景観づくりから、自分たちのまちに誇りを持ち、主体的にまちづくりに参加することを通じて人やまちが元気になる、地域コミュニティが活性化する、そんなまちづくりを私たちは目指しています。

そんな思いを込めた「瀬戸内海景観ガイドライン」です。以上で報告を終わります。ありがとうございました。

■参加者討議

司会：
　ありがとうございました。これから参加者討議を進めます。会場の方から質問ありませんでしょうか。

嶋田：
　久留島先生にお聞きしますが、小豆島の素晴らしい景観の多くの綺麗な写真を見せて頂きましたが、元々小豆島ご出身だそうで、住まわれていて初めてわかるような場所が数多くあると思います。
　それで、小豆島ではない他の地域に行かれて風景を撮影されるときは、景観の視点場となるような場所をどうやって見つけられているのですか？

久留島：
　私自身、五島の福江島（ふくえじま）とか、沖縄は本島、つい先日も犬島、男木島に行ってきました。
　小豆島が他の島と違うところは、やはり標高があるので高い所からの眺めが東西南北に渡り、朝日から夕日まで綺麗だということ、それから小豆島には歴史的な文化が非常に沢山ある事です。その昔天領で幕府の直轄地であったこともあり、また閉鎖的な島ということで人口流入がほとんど無く、昔からの伝統芸能や文化が非常に数多く残っています。
　例えば夏祭りにしても、紹介しきれませんでしたが、島の数十箇所で行われます。小豆島町長は「宝の島」だと言われていて、あまりにも沢山ありすぎて絞りきれないというのが悩みの種という所もあるのですが、一番大事なのは伝統的に守られてきた自然や文化を大切にこのまま保全して頂く事だと思います。
　30 年前に島に帰ってきたときから比べると景観もまち並みも少しずつ変化しています。それをここで何とか止めていきたいという感じが住民にあります。
　今高速道路が土日 1000 円です。海上交通も大事な交通手段の一つですが、全く見放されておりますので、小豆島はどちらかというとお金がかかるという所があり、観光客の流入も少ないことから、非常に苦しい現状だと思います。そして少子高齢化が進んでおります。
　離島振興と言いますか、その辺りを含めて景観を守っていただけたらと思います。十分な説明かどうかわかりませんが以上です。

嶋田：
　景観を知るということは大事だと思います。住んでいる方が新しく認識するという事は非常に大事だと常々思っているので、そういう歴史性というものを思った次第なのですが、今後続けていって頂いて、他の地域でも撮して頂いて、景観の素晴らしさというものをもっと多くの人に伝えて頂けたらなと思います。

司会：
　今の視点場を捉えるという観点から、前原さんいかがでしょうか。

前原：
　視点場に限らず、誇りに思う景観というような観点からお答えします。自然は自然景観とか、歴史文化は歴史文化景観とかではなく、そういうくくりを超えてつながっていることを意識することが大切だと思います。
　例えば八重山でしたら海、珊瑚礁、山並み、岬、そういった自然の風景の中から島の歌や踊りが生まれ、また島の織物がそこに生えている植物から作られるなど、自然も生活文化もみんな繋がっているのだと思うんですね。
　ですから計画論では歴史的景観とか自然景観とか言いますが、本当はみんな繋がっている。その辺りのことを住民みんなが認識する、気付く、あるいは伝える事が非常に重要なのではないかと思います。
　渡名喜島や竹富島の白砂の道についてもハブとの関係で少し話しましたけれども、暮らしの知恵との繋がりに気付くかどうか、うまく知恵が継承されるがどうか、そこら辺りが大事だと思います。

鳴海：
　佐保さんと前原さんに質問です。
　前原さんは島のスケール感という話をしましたね。その観点というのは専門家にはわかるのですが、一般の方にはスケール感とは何か、何が違うのかといった辺りのご説明が少し足りなかったので、スケール感というのは非常に大事だと思うので、もう少し具体的に言うとどういうことなのか教えて欲しいです。
　佐保さんは、五島で人が住んでいないのにまち並み保全とはどういうことか、人が住んでいたらまち並みがどんどん変わっていってもいいんじゃないか、とそのようなニュアンスのお話があったので

すが、それについて「守る」こと、「変わっていく」ことというのは具体的にどういう事かお話し頂ければと思います。

前原：
　島というのは、やはり大陸だとか陸続きの所とかと違って土地が小さいので、何か施設を導入するにしても、あるいは道路を造るにしても島の環境に与える影響は大きい。土地の広い所と同じ感覚で施設をポーンと島に持ち込むのは非常に危ないと思います。島の大きさと施設の大きさによっては島自体が非常に陳腐なものになってしまわないでしょうか。
　小さな島ではあるけれども、中に入ると非常に豊かに見せる空間の工夫がある、そういう豊かな奥行きのある島であるような工夫を考慮しないと、島に不釣り合いなスケールをそのまま持ってくるのは問題ではないかなというのが一つです。
　といいますのも、これは昔の話ですが、琉球王府時代、中国からの冊封使（さっぷーし）が沖縄にやって来た際、首里城までの行程を、直線で行くと１時間くらいで着くものをわざと廻り道をするのです。景色の良いところや見せたい所を見せながら、ゆったりと奥行きを感じさせたそうです。
　また、首里の高台からはどこからでも海が見えるのですが、王家の別邸である識名園（しきなえん）には海の見えない眺望の場所をわざわざ作っています。大陸の広がりを感じさせるためにです。ですから琉球王朝時代には景観というものを外交の戦略的な要素として意識して作っていた面があるわけですね。
　このように、地域性を問わず単純に同じものを持ってくる、つくるというのではなく、島の特徴を活かすスケール感を考える必要があるという説明がしたかったのです。

佐保：
　伝建地区を博物館的に扱う事が良いのかどうかというのは、私自身の疑問です。随分お金をかけているのに人が全然住まない、どんどん空き屋になっていく、けれども整備のお金は入れていくという事について、私は否定的に思っております。
　一方、島の中でも比較的活力があるところについては、基本的にはお金は出ないで、個人的に建物の更新は任されるわけです。
　どちらにお金を使うのがどう効果的かという所については、私自身も非常に悩ましく思っておりまして、あまり議論もされていないように思います。
　例えば五島にしろ、大島にしろ、壱岐にしろ、昔は漁港で、住んでいるのは漁師の方がほとんどだ

ったような集落も、一般のサラリーマンも公務員もいるし、職業も色々雑多になってきているわけです。

こういった、いわゆる島の集落で伝建地区にも指定できないけれども、人がそこに住んでいるといった所を整備する術というのが、あまり議論されていないように感じます。これは私がこれからクリアしないといけない課題ではないかと思います。

吉野：

沖縄の前原さんにお聞きしたい。竹富島で観光事業をしている方から公民館協力費を一般住民の倍額を徴収するという制度ですが、これは今日のセミナーで非常に重要な切り口だと思いました。

観光による維持活性化と、景観・文化の保全をお金の制度にからめて維持していこうという非常に重要なケースだと思うのですが、これをやられた時期とか、またそれをするにあたっては、観光事業者から相当な反発があったのではないかと思うのですがいかがでしょうか。

景観をやるときに、いつも受益者は誰かという問題があって、補助は税金ですから地域の人はもらいっぱなしのイメージなのですが、このケースの受益者負担の考え方が面白いなと思いました。それを一つお聞きしたいです。

それと感想としまして、今日は農村歌舞伎を 2 箇所見せて頂きまして、あの景観の中にああいった施設が残って一つの観光の大きな財産にされているというのは、住民の方の評価も非常に高いし、観光客はまだ気付いてないといったアンケート結果が出ておりましたが、これは非常に大事な観点だと思います。

島というと、海とか山とか従来型の観光資源に行きがちなんですけれども、やはり歴史景観としての視点を大事にして欲しいという事と、それから身近な生活の景観も大事にして頂きたい。

今日私は小豆島を歩いてみて、もっと期待していたのですが、身近な生活のまち並みの魅力という観点から言えば、正直 100%満足できませんでした。

例えば「迷路の町」、私達は路地とか迷路といったものが大好きですが、迷路の町のアーケードのアーチがちょっとどうかなという印象を受けました。実際入ってみるとどこが迷路かなというくらい空き地が多くて、迷路を大事にしているという印象を受けませでした。

このセミナーの資料にも写真が載っていましたが、そこはもう少し生活とか日常的な生活空間として大事にして頂きたいと思います。ただ、大事にすると言っても誰がお金出すのか、それは土地所有者であったり、そこを利用する人であったり、色々あるのですが、その辺も含めて非常に日常的なま

ちなみ景観という視点を、島の景観の中でも是非今後深めていただきたいという感想を抱きました。

前原：
　竹富島の自治の力というのはやはり県内ではダントツだと思います。これには背景があるんですね。
　竹富島は那覇から石垣に行って、そこからさらに船で渡るところなのですが、民芸の島という事で、大正時代ぐらいから関心ある人には知られていました。柳田国男とか柳宗悦といった日本を代表する先達が当時わざわざ時間をかけて島を訪れ、滞在しながら島の人達と交流したんです。そういうことでいろんな島の良さというものを島の人自らが気づかされ、再認識していくわけです。この人達が島のリーダーになっていくのです。
　その後も、非常に質の良い来訪者が島に滞在して島民と交流する中で島人の意識が高まっていった背景があります。そういった中で、お客様を受け入れ、もてなすといったホスピタリティーもはぐくまれてきたわけです。ですから戦前、大正の頃からそういう蓄積があった。

　ところが、沖縄が本土復帰した際に石垣島や竹富島などの環境の良い所、特に海岸線などが本土の大手資本に買い占められたのです。竹富島も島の３分の１くらいが買い占められたのです。この時に島の人達は非常に危機感を持ったわけです。それをきっかけに「竹富島憲章」をつくりました。その基本理念は「売らない、汚さない、乱さない、壊さない、生かす」といった事が書かれたもので、憲章を作って徹底していったわけです。

　この島は集落が一つに見えますが３つの地区から成り立っていて、常に３つの地区で競争しながらやるのですが、いざ島の大事となると一つにまとまるんですね。その一致協力の精神を「うつぐみの精神」と言いますが、これを発揮するわけです。買い占めの危機にその精神を発揮して竹富島憲章をつくる中で、今後は伝統集落を柱に観光業をこの島の生きる礎にしようということを決めたのです。

　竹富島憲章が出来て、この集落を今後の観光の柱にしようということで方向性が決まったのですが、やはり観光事業をやっている人と住民との間にいろんな課題も出てきたのです。どうしても観光に係わる人達と、そうでない人達との間で問題が出てくるんですね。それをどうにかしなきゃいけない。そこで島の人たちは「うつぐみの精神」を発揮して、公民館協力費という知恵を生み出したのですね。ですから公民館協力費による負担の是正という仕組みはもう 30 年近く前、つまり伝建選定された頃あるいはそれ以前から取り入れています。

鳴海：
　どうもありがとうございました。そろそろ時間なのですが、今日はＪＵＤＩの４つのブロックから参加して頂いていますので、せっかくですから各ブロック１名ずつ、代表でこの小豆島の印象を話して頂きたいと思います。九州ブロックは尾辻さん、関西ブロックは堀口さん、関東は杉山さん、四国は真田さんに一言ずつ感想を頂いて、これからの小豆島の景観づくりまちづくりのヒントになればということでお願いしたいと思います。

尾辻：
　九州ブロックの福岡から来ました尾辻と申します。昨日は高松市に泊まって、今朝、高松市内、特に商店街の活性化、エリアマネージメントで有名な丸亀商店街界隈を見て歩いて、その後、小豆島に渡って来ました。セミナー前の肥土山の散策では佐保さんとずっと話しながら歩いていたのですが、九州の島とは随分違うなぁと感じました。歌舞伎とか色々な文化があって、やはり何か奥深く豊かな感じがしましたし、また今回はイベント期間中ということで沢山の人がいて山里が賑わっていたので、なお一層、豊かだなぁと羨ましく、そういった印象を持ちました。

　今日は半日足らずの時間で見て回っただけなので、なかなか小豆島の全体像を推し量る事はできませんが、久留島さんのスライドをいくつか見せてもらって、どれも素晴らしく色々な祭があって、しかもまだそれぞれが生きているというのが非常に印象深かったです。

　やはり島というのは歴史的な背景や環境によって色々と違いがあると思いました。産業の要素に強く影響を受けているし、前原さんの講話では沖縄は一時アメリカの領土にもなっていた歴史に強く影響を受けているとの指摘も印象深く思いました。また常々僕が九州の方の島で感じているのは、日本海側というのは非常に冬が厳しく、波も荒れるので、僕も仕事で行ったときに船で酔ってしまった事もありました。それ程、厳しい自然と密接な関係にある。そういった点で、瀬戸内の島々の景観とは、随分違うなと思いました。そして、特に九州では沢山ある島を『離島』と呼んだりしていて、その『離島』という言葉の違いに景観の違いも象徴されるように思います。

　それで一つコメンテーターの先生方にお聴きしたいのは、私も専門家として景観計画の仕事をしているのですが、その中で時々思いますのが、景観で本当に食っていけるのか？という事です。香川県のガイドラインの目標にも「美しい瀬戸内を未来へ」とあるのですが、それが現実の将来へどう繋が

るのか。一般的には景観計画は規制・誘導のルールが中心の計画でしかなく、そんな中で、瀬戸内のような日本の美しい景観を創り守っていくためにはどうやるのか。景観は、住民の方達の地域での生活、営みがあって形づくられているのだと思います。有り体に申しますと「じゃあ、景観を支えている島の人はどうやって食っていけるのか。」という率直な課題があって、また私自身の仕事の中でも壁に突き当たることがあります。それについて、手短にコメントいただければありがたいです。

鳴海：
　それをやると時間がなくなるので、懇親会で是非皆さんと話したいと思います。

堀口：
　関西ブロックの堀口です。ちょっと瀬戸内海だけに限定しないかもしれないですけれども、島の風景には２種類あると考えます。
　一つは遠景から見た重なり合う島々の風景、わりと奥行きがあって、高いところから見ると立体的な自然の風景で、多島美というべき景観です。私は一昨年前に韓国の慶尚南道の南海岸の計画に関与しましたが、ここと非常によく似た風景があって、これは本来自然が持っている美しさです。これをどう維持するかという課題は共通すると思いました。これはそれぞれの地形が持っている自然条件ともいうべき大切な要素です。
　二つ目は、実は琉球ブロックの方や九州の報告を見るとやはり島は孤立した閉鎖型の環境にあるので、それぞれの集落やまち並みは非常に個性的で、ある意味自然も歴史も一連の条件の中で非常に良く出来た環境になっている。それはそれなりの個性にあった機能性なり多様な魅力を持っていると思いました。その多様なゆえに魅力があるので、それを大事にしないと楽しくないですし、わざわざその地に行く意味があるのだろうと思います。
　先ほど吉野さんの話にもありましたけれども、農村歌舞伎などは非常にユニークな景観です。今日はたまたま農村歌舞伎だけが目立ったのですけれども、そういう風景がきっと色々とあるはずなので、それをもっと大切にされれば多くの方にとっても感動や感激を与えるのではないかと思いました。

真田：
　四国ブロックから来ました徳島大学の真田です。小豆島の印象ということですが、私は元々広島県福島の出身で瀬戸内海を見て育っているということと、それから今徳島の山間部によく行っていて、棚田の風景などを見慣れているので、外から来てどうかというより、共感できるような風景だなと感

じました。
　良い所についても共感できた一方で、これからどうにかしないといけないなという課題についても同じような事を見つけました。
　それというのは、土庄港からバスに乗って視察させて頂く所まで行く途中、観光客の方が多く通るであろう道の一部に、廃墟みたいになっている箇所が凄く多くて、やはりそういうものを見ると人口減少とか、あるいは先ほども船で移動しないといけないので不便を感じているというような話がありましたが、やはりどんどん人が減っているのではないかなと思いました。
　景観ガイドラインなどもつくられていますが、人が減少してきているような場所では、開発によって景観が壊されるというよりは、人がいなくなると景観が崩れていくということが凄く多いと思います。
　ですので、今をどうするかというよりは、これから島に残ってくれる人をどう育てるか。仕事があるから島に残るのではなくて、自分で仕事をつくってでも、自分で仕事を生み出してでも、島の景観を守っていきたいという、自分達の住んでいた地域の故郷の姿を残していきたいというような人をどうやって育てていくかを、山間部でも島でも今後考えていかなくてはいけないと思いました。
　今日は沖縄の話も聞かせて頂きましたが、今は凄くうまくいっているということだったので、それを次世代に繋げていくためにどういう取り組みをしているのかということも、後の懇親会で聞いてみたいなと思いました。

杉山：
　関東ブロックの杉山です。今日は素晴らしい企画に呼んで頂いて有り難うございました。ちょっと遠いので悩んだのですが、参加して良かったと思います。まずはお礼申し上げます。
　私はちょうど先月に直島、豊島、女木島、男木島と廻りまして、今回、小豆島に入ったのですが、どちらでも一番良かったと感じたのはホスピタリティの面でした。
　小豆島では、バスの運転手さんに色々面白い話をしていただきながら廻って頂きましたけれども、豊島では、見ている時にサングラスを落としたのですが、それが芸術祭のインフォメーションセンターに次の日の朝にすぐ届くといったことがあり、非常に目が行き届いているんだと思いました。

　先ほども調査がありましたけれども、この小豆島も含めて、どの島でも凄く誇りを持っているなと感じました。私は、１人で歩いていたものですから、どの島でも色々声をかけていただいて、もうほとんど見て回ったというような高松の人と知り合ったり、直島でアートボランティアをしている人と

知り合ったりとかいったことがありました。
　前原さんのお話のように、香川県がまとめられたガイドラインの中では「土地の誇り」というようなものが、まとめられていて、こういうガイドラインの中でここまで誇りについて書かれているのは今まで無かったのではないかと、感じました。皆さん誇りを持って取り組んでらっしゃる所が素晴らしかったなと思ったりします。

　島の棚田が見たいというように、地形に沿った営みの景観を楽しみにしてきたのですが、あぜ道の川沿いがコンクリートで固められていて可愛そうだなと、川はないがしろにされているという印象を正直持ちました。ある時期の造成の仕方みたいなものが残っているように思います。

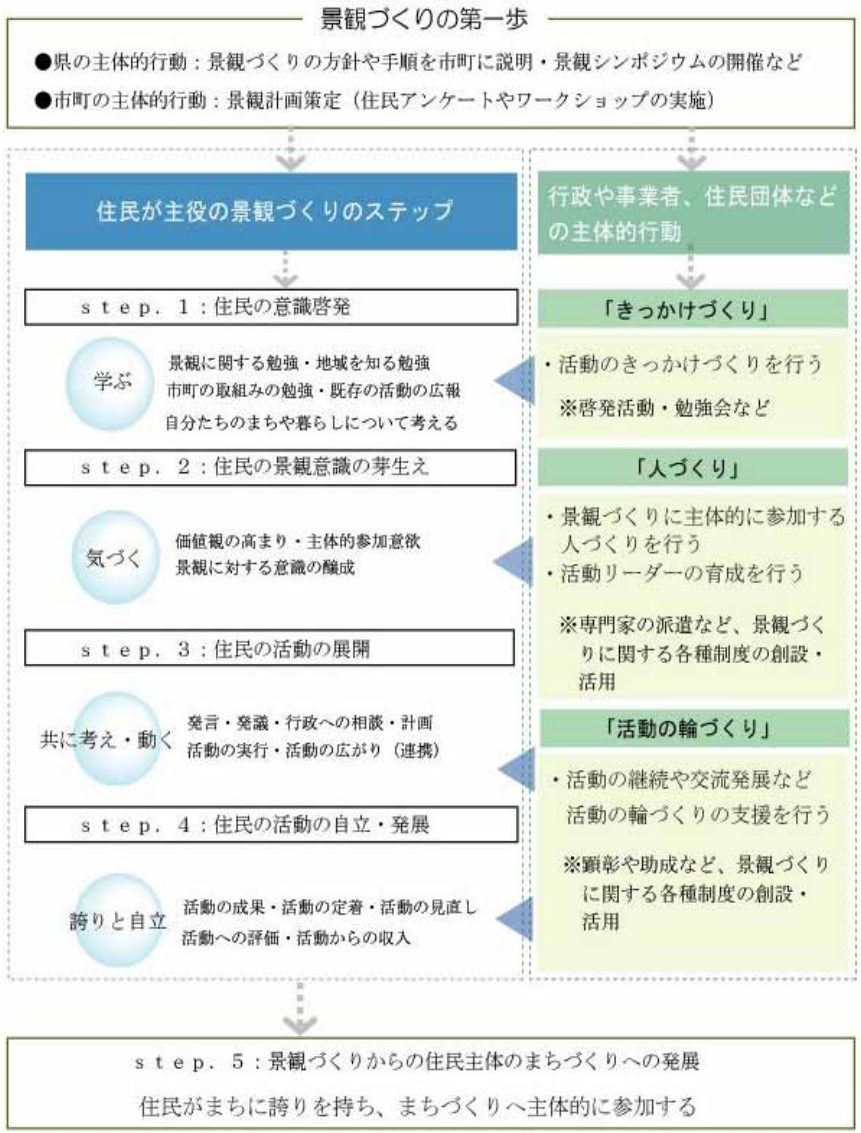
　池田の方の港を見ていないので、港それぞれについてはわかりませんが、小豆島の印象としては土庄の港ということになります。もし一人だけで港におりたったら、案内サインなどがわかりにくく、降りたとたんにどのように動いたらいいか呆然となったかも知れません。

自然の素晴らしさと、人のアクセスのあり方とか改めて見直してみるのもいいかも知れません。

　直島、豊島の芸術祭が今後３年置きの開催になるという話を耳にしましたが、そうなってくれば、先ほど前原さんも仰ったような質の良い来訪者というのがきっとこれからも増えてきて、そしてこれだけ地元の方々も誇りを持っておられるので、双方が相まって素晴らしい発見をして頂けるのかなあと楽しみに思います。
　私個人としては「醤の里」などの産業景観を楽しみにしているので見に行きたいと思っています。
　このように人の手で作り上げてきた景観も、それぞれの地域に相応しい中で出来上がってきた、地域ならではのものでしょう。お金になるのかなというような疑問もあるでしょうが、地道に醤など地場の産業をもっと取り上げ、話題になるようにと思ったりしました。そういう事も経済の活性化に繋がる一面もあるのではないかと思います。
　あとちょっと聞きたかったのは、素麺の風景というのは写真には無かったですね。きっとお持ちでいらっしゃると思いますから、またご紹介下さい。

司会：
　ありがとうございました。それでは、地元の方にお願いします。

葛西：
　今日は遠い所からありがとうございます。
　私は小豆島を日本一素晴らしい所だと思っています。今日見られた所以外にも、「村里づくり運動」とか官民一緒になって岡田町長の元でやっています。しかし、色んな事で素晴らしい物が、例えば今回古い建物が道路拡張のために無くなるとか、そのために私の方も色々動いてみたのですが無理でした。
　今日通られた以外にも、例えば小豆島八十八箇所霊場巡りの古い道があんですね。山伝いに歩いてめぐる。そういったもっと奥深い所もありますので、またそういう所を体験して頂いたら、もっと素晴らしいものがあります。
　これからも我々も先生方のご意見を聞いて今日参考になりましたので、色々頑張ってやりたいと思います。今後ともご指導の方よろしくお願いします。今日はどうもありがとうございます。



「瀬戸内海景観ガイドライン」より

■島の景観セミナーのしめくくり（幹事：横田 宜明）

今回セミナーを開催しました土庄町では、「守る景観」として今日皆さんご覧になった300年からの歴史を誇る農村歌舞伎とか、虫送りをやっています。

また、「創る景観」としては、葛西さんからお話ありました、渕崎のルミナリエなど、住民の方が新しい取り組みを一生懸命やってらっしゃいます。

それから、「育てる景観」としては、「村里づくり」として地域の方々が力を合わせて景観づくりを進めています。

景観づくりの第一歩というのは、行政による景観計画というのが今進められています。それを支えるのは住民ですし、住民主体の景観づくりといったことが非常に重要だと思います。住民がまちに誇りを持ち、まちづくりに主体的に参加していくということが大切だと考えています。

島の景観、それを支えるのは住民です。住民がまちに誇りを持ち、まちづくりを主体的に参加していく景観まちづくりを進めるために、今回のセミナーを開催しました。

今回のセミナーをきっかけとして、参加の方々が瀬戸内海の景観から広く島の景観について考えて頂けるものと考えています。

景観まちづくりに興味を持つ方が増え、こうした場を通じて相互に交流を深め、活動の輪づくりが広がっていく。

私達、都市環境デザイン会議では、これからも魅力ある景観づくり活動をするために地域の方々と一緒になって活動を進めていきたいと考えています。

ご講演いただきました先生方、今日はどうもありがとうございました。皆さん盛大な拍手をお願いします。お忙しい中、町長をはじめこの会場を設定して下さった土庄町の方々にも盛大な拍手をお願いします。また遠いところから説明に来て下さったJUDIの方々ありがとうございました。後援をいただきました香川県都市計画協会、土庄町にお礼申し上げます。

参加されました皆様、ありがとうございました。

■現地見学会報告（横田 宜明）

「島の景観セミナー」現地見学会を行った、土庄町肥土山の景観について報告する。
尚、セミナー参加者は 50 名、現地見学会参加者は 30 名であった。

(1)位置と地形

土庄町肥土山は、小豆島の西側中央、内陸部に位置する。小豆島最高峰の星ケ城山（817m）、寒霞渓、美しの原高原、皇踏山（396m）に至る北側稜線と美しの原高原から南西方向に大麻山(427m)、高壺山（159m）に至る南側稜線に挟まれた伝法川の中流域、伝法川の支流殿川との合流部に位置し、南東方向に開けた盆地状地形をなしている。

肥土山の位置（ヤフーマップより引用）

銚子渓付近から肥土山、伝法川下流及び瀬戸内海の眺望

皇踏山山麓 笠ケ滝から、肥土山、殿川上流の眺望

蛙子池

(2)歴史と伝統

瀬戸内海の島々では、降水量が少なく大きな河川もないため米を作れる土地は限られていた。この肥土山は伝法川の流域であり、森林を形成する周辺の山々からの涌水を受け古くから稲作が行われていた。しかし、限られた水を確保するため水争いがあり、古くは治承 4 年（1180 年）の古文書に記載されている。

こうした水不足を解消するため肥土山村庄屋 太田伊左衛門典徳は伝法川上流にため池をつくる

ことを、周辺 3 か村の庄屋、村年寄の連名で天和 3 年（1683 年）に倉敷代官萬年長十郎へ願い出て、貞享元年(1684 年)に許可を得た。300 人あまりの受益農家にあって、蛙子池普請目録によれば「人足都合七千六百七二人半」による百姓自普請によって、貞享 3 年(1686 年)の春、完成することになった。6 月 15 日待望の池水が離宮八幡神社境内まで達し、村民は喜びこの日を例祭日（現在は 5 月 3 日）として定め、歌舞伎を奉納している。

小豆島は、瀬戸内海海運の要衝として古来より近畿と九州、大陸とを結ぶ中継地とされ、上方との交流が深く、上方の芸能文化を伝わってきた。その一つに歌舞伎があり、小豆島には戦前 33 の歌舞伎舞台があったが、現在残されているのは、この肥土山と隣の中山の農村歌舞伎舞台だけとなっている。共に国の重要有形民俗文化財に指定され、肥土山では、蛙子池が完成した例祭日以来 300 年以上、住民によって守り続けられている。

また、肥土山では「虫送り」が行われている。半夏生の日の夕方、7 月 2 日ごろ、夕方に多門寺本堂で住職が大般若経をあげ、稲の虫除けと豊作を祈祷し、その灯明の火を朱塗りの手燭に移し、旧毘沙門堂跡の虫塚へ行き、そこで虫供養の読経を行い、離宮八幡神社へ行く。境内に設えた篝火に移し、子どもたちが持つ火手に点火し、子どもたち火手をかざして、「稲虫来るな。さねもりうせろ」と唱えながら、あぜ道を一列になって 1 キロ先の蓬莱橋まで行って火手を伝法川に投げる。多門寺本堂で封じ込められた「害虫駆除」「五穀豊穣」の立て札を地区の四隅に立て、行事は終わる。この「虫送り」行事が 300 年以上、住民によって守り続けられている。

離宮八幡神社境内で毎年 5 月 3 日開催される農村歌舞伎

虫送り

肥土山、中山、蛙子池の位置

(3)景観的特徴

瀬戸内海の島にあって、ダイナミックな山の景観と伝法川上流の銚子渓、中流域の田園景観、中山での棚田景観に特徴がある。また、農村歌舞伎の伝承、「虫送り」行事が300年以上も続けられている。

江戸後期の画家松川半山の肥土山離宮八幡神社には、田園風景の中の歌舞伎舞台が描かれ、今とかわらぬ風景が描かれている。

中山の棚田

多聞寺　松川半山筆

島四国八十八箇所霊場 多門寺と大麻山

肥土山離宮八幡神社周辺の田園景観（中央は肥土山の舞台）

肥土離宮八幡神社　松川半山筆

(4)瀬戸内国際芸術祭

肥土山は、瀬戸内海国際芸術祭の小豆島の会場（2010.7～10）となり、多くの見学者が訪れ、本現地見学会でも多くの作品が肥土山の景観の中に置かれていた。肥土山においても少子高齢化が進み、農村歌舞伎などの伝統行事の担い手の育成が課題となっており、今後、都市との連携をどのように図っていくかが課題となっている。

今回の現地見学会では、こうした肥土山の景観の見学を行った。

小豆島エリア
アートマップ
小豆島の風景とアートの融合を是非ご覧ください。
肥土山農村歌舞伎保存会
肥土山農村歌舞伎特別公演
中山農村歌舞伎保存会
中山農村歌舞伎特別公演
中山千枚田
醉樂団
忠樂中樂
島の劇場
若貴婦人の助言
土渕海峡
肥土山
西中山
中山
ART SETOUCHI 2010
駐車場
トイレ
推奨ルート(徒歩約40分)
豊福亮
宝船
スゥ・ドーホー
Net-Work
河口龍夫
心の巨人
栗田宏一
土と生命の図書館
安岐理加
「森」「径」「泉」
丹治嘉彦
海を繋ぐもの
武蔵野美術大学わらアートチーム
わらアート
王文志
小豆島の家
ダダン・クリスタント
声なき人々の声
センス・アート・スタジオ
小豆島を輝かせる
岸本真之
つぎつぎきんつぎ